一二九。 ウダヤギリ殿全景。

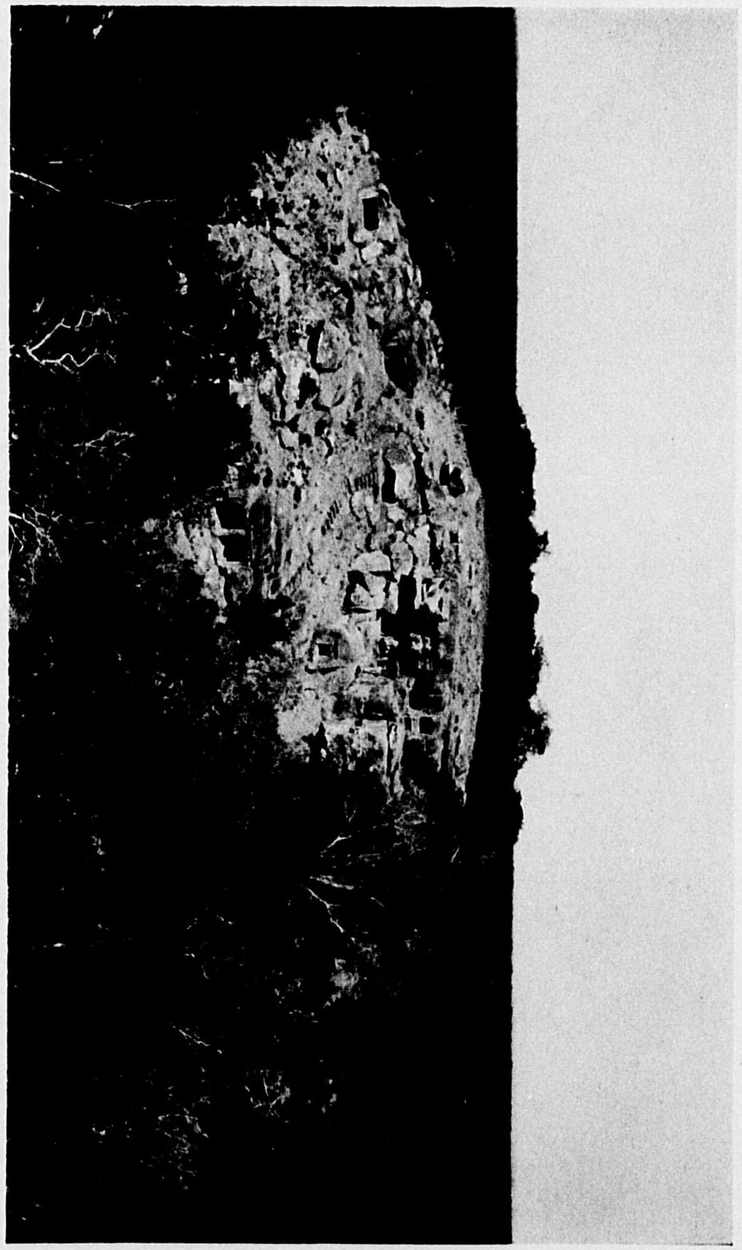
（昭和十年三月三日）

偉大な驚嘆堂があるので、非常から有名なブバネスワー（Bubhaneswar）という所から四哩ばかり北に、ウダヤギリ（Udayagiri）と呼んでゐる窟殿の一群が、道路をへだてたカンダギリ（Khandagiri）といふ窟殿の一群と相對して、小山の斜面に散在されてゐる。前者は西向で後者は東向で、つまり南北に走つてゐる道路の両側にあるのだから、自然さういふ結果になつてゐる。近く公立宿舎があり、殿い構内にたゝてあるから、宿泊に不便はない。

月夜のはんぱ等はさぞ華かでよからうと思はれる。

ひとりに家になし、

圖は其全景で、カンダギリの頂上から東を向いてとつた寫眞である。昭和十年三月三日、雛の節句に、折柴の好時に氣も心も輕く、ブーリの旅宿から車を雇つて、ジャガーナート寺（**三九・一四〇**）からアンキスワーの大堂（**一三一・一三五**）を經、カンダギリの公立宿舎で休憩して、午後から岡方の窟殿の見學をすましてブーリの宿へ歸る事ができた。



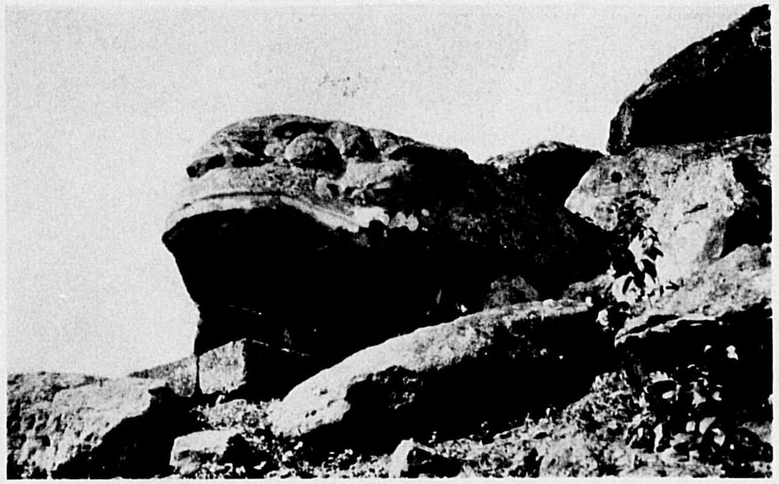
一二九

窟殿の見學をすましてブーリの宿へ歸る途中、夕刻ふと一群の窟殿に出會ふ事ができた。

両窟殿共大規模の異國新聞情坊もないし、又一基の塔婆もない。宝は多くは唯一つであるが、時にウダヤギリ所在ラニ・ガ・ナウーハル（Rani Nauar）の如く、二階になつてゐるものもある。尚ほ各窟に紀年の銘文がないので、その方からはつきりした事はいへないが、他の方面から讃で銘文のある窟殿は、西紀以前と推定し得るといふ。其一なるハシ・グムファ（Hathi Gumpha）象窟（）には一七行に亘る銘文があるが、此等は專門家の研究によると、西紀前三〇〇年乃至三五〇年ださうな。此は自然窟だが、阿育王以前の佛教窟殿で、次の窟は殆んど總て何等人工を加へないといふの自然窟であるといふ事である。

圖の中央に壁面に沿へる石階が見えてゐるが、此石階の終るあたりに一窟がある。これはバーグ・グムファ（Bagh Gumpha）虎窟（虎窟）と呼ぶもので、次の

一三〇



一三一

上、一三〇。ウダヤギリ窟殿虎窟。

下、一三一。カンダギリ窟殿入口。

（昭和十一年三月三日）

（物差は曲尺の一尺・昭和十一年三月三日）

前圖の解説中に記した「虎窟」(Bagh Gumpha)を近くみたところ。眼鼻と上顎とは明かだが、齒は缺けてしまった。隨分奇拔なもので、入口の右方に阿育王時代の文字の銘文があり、其初のは佛教に關する組合せ文字、終りに卍がほってあるさうだが、これは見なかった。一三〇は其の全景で、中央の入口の有樣も大體判る。

一三一はカンダギリ窟殿の出入口の一である。その兩方の片蓋柱は、少しく異なってはゐるが、上部の葱花系統の拱と共に、カーリー窟(九四)以下各佛教窟殿の圖に揭げたのと同式で、ここのは全部が耆伊那窟ではあるが、いろいろの點から佛教の影響を受けた彫刻があるので、頗る興味を惹く。普通カンダギリ(Khandagiri)といってゐるが、又コンダギリ(Khondagiri)ともいふ樣である。

一三二。ブバネスワー大堂遠望。　（昭和十一年三月三日）

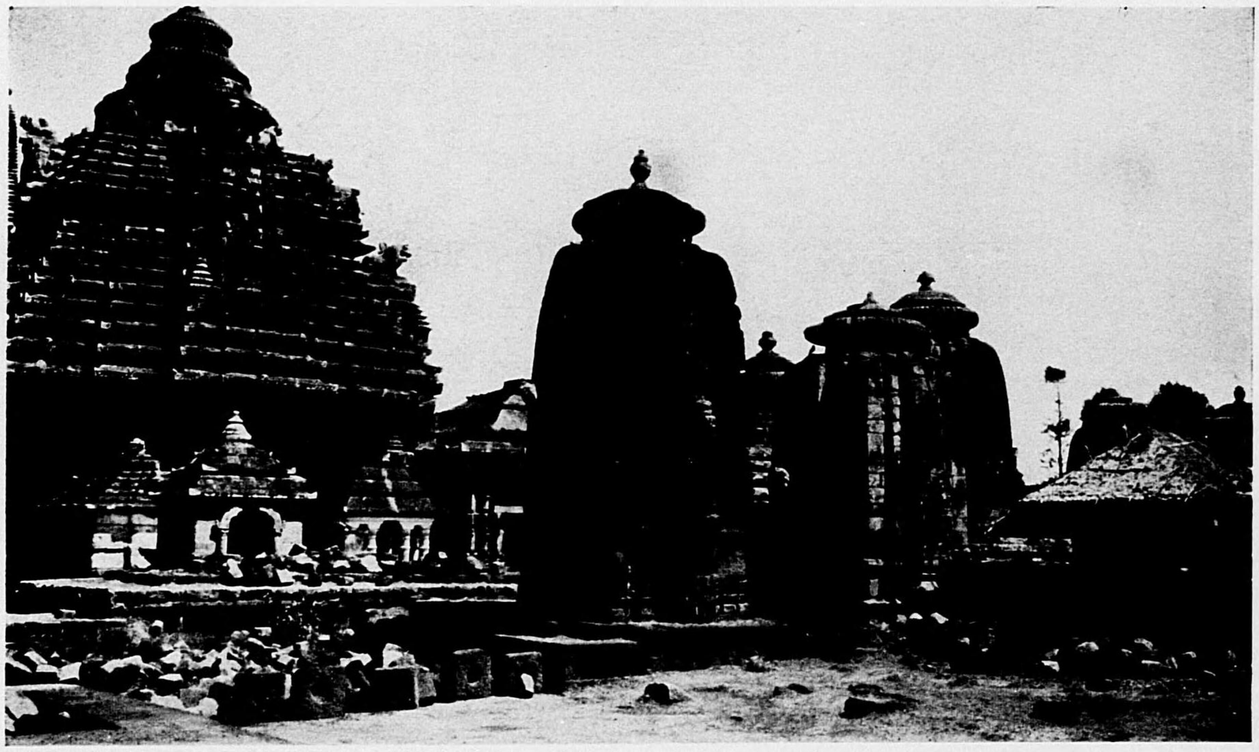
當時はブバネスワー驛には適當な時間に汽車の便がなかったので、私はプーリから車で往復をした。併し案内書には同名の驛から四哩とあるから、馬車でも得られれば其方が便利であらう。

ブバネスワーには其昔七〇〇〇の堂があったさうだが、現今は五〇〇棟が殘存してゐるといふ。而も此等現存の諸堂は、古くは第六世紀に溯り、第十二世紀頃の絶妙な意匠のものから、續いて今日の墮落衰頽期のもの迄、多くの標本が大なる神聖池の邊に建ってゐるとある。

*　*　*　*

其多くの殿堂中、ここに掲げたのは最大のもので、高さ一八〇尺といふ。四隣の群堂を壓して高く聳えてゐるから、隨分遠方から目標となる。圖はカンダギリ・ウダヤギリの窟殿へ行く道、つまり大堂の裏の方からみたところ。正面の方からは、この樣に隔っては見えないが、とにかく附近諸堂の盟主たる資格は充分である。經過の年數からいへば、もっと古いのがあるが、次の三圖には此堂の近景を示しておく事にした。

一三二



一三二。ブバネスワー大堂　其一。

異教徒は一切内部の觀覽は、例により例の如くできない。正面の門からみる事もできないし、又正面からでは背の高い本堂の全景は見えない。ところが左側面のあたり、境外に半分壞れた廢堂があり、其壁の上にのると、塀の上から内部が見える。どの寫眞も皆ここからのと見えて、本堂の左側面のみが寫されてゐる。唯一枚背面からのがあるが、餘程うまくやって塀の外から寫したもの。私には、その樣な伎倆はなし、上ってはみたが左側面では逆光線でこれも望はないから、丁度右側面に小門があり、あいてゐたので番人が文句をいふ迄に、四枚續きで寫してしまった。其内三枚をだしておく。一三三が最も前で、其次に一三四、尙其次に一三五が續くのである、だから順に記すと、「外陣と其前方の有樣」「外陣と本堂との關係」、「本堂の全景」といった有樣である。

*　*　*　*

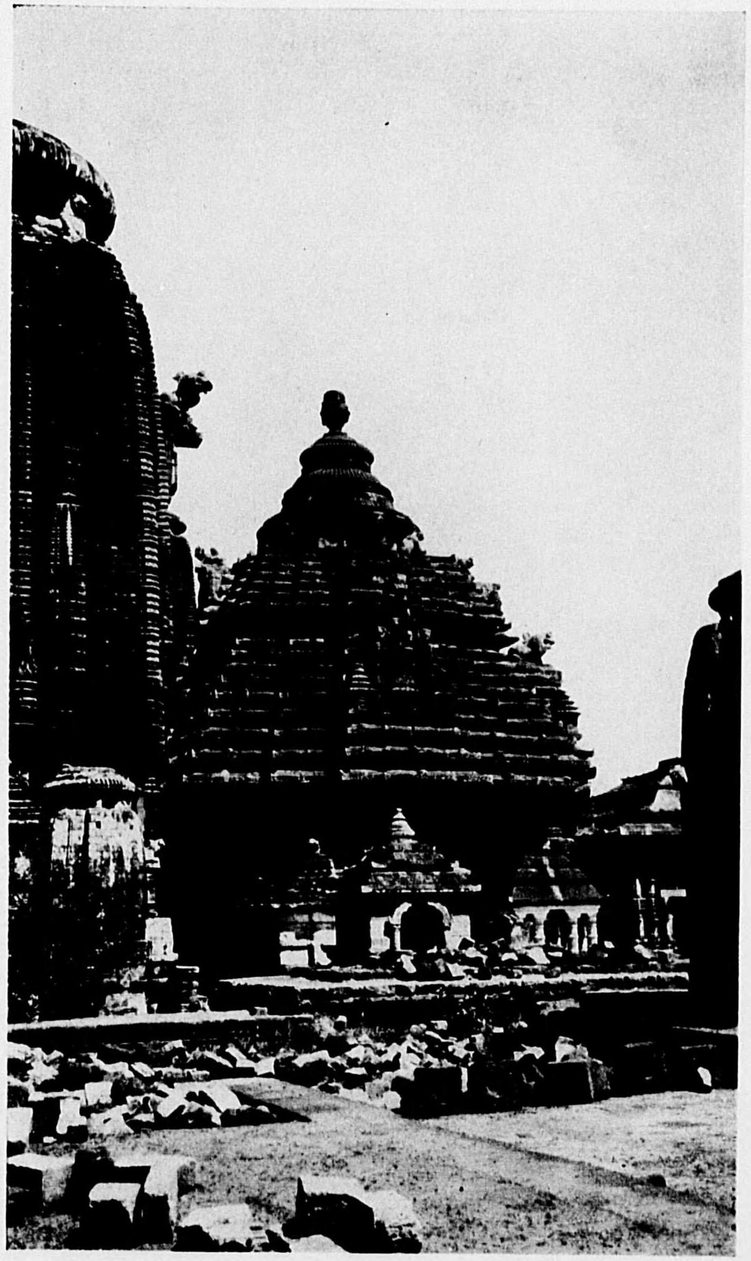
大堂は「隣伽王」(リンガラージャ(Liṅgarāja))堂として知られてゐる。レラチンドラ・ケサリ(Lelat Indra Keśarī(Lalitendra Keśarī))(六一七—六五七(推古天皇より齊明天皇頃の人))の建立と傳ふるも、これは全くの傳說に過ぎないので、そんなに古いものではなく、先づ假に第九・第十世紀頃のものと考へ得るといふ說と、西紀一一〇〇(康安二年、平安後期)以降といふ說とある樣である。だから第十世紀としておけばよからう。何れにしても純なるインド・アリアン(Indo-Aryan)式の建築であるといふ事に於いては異說はない。本堂高一八〇尺といふ。

其平面は幅さ六〇尺より七五尺の間で、長さ約二一〇尺とあるが、後に補加したといふ部分を入れると、長さは約二八〇尺となり、元からの部分だけだと一六〇尺となるので、このあたりのことはよく判らない。その前方の二室——一三三では前にある小室のために隱されてゐてよく見えないが——は、一說には一〇九〇年(寛治四年)から一一〇四年(長治元年)の間、他の一說では第十二世紀若くは其以後の補加であらうといふ。併しながら當初は何れの殿堂も二室、即ち「外陣と本堂」とより成ってゐたと見るべきで、現在の多くは四室あるも、前方の二室は大概後補であるさうである。だから此種の殿堂は方錐狀の外陣と、特殊形式の塔の樣な本堂より成ってゐるのである。

(昭和十一年三月三日)

一三四。 プバネスワー大堂　其二。　（昭和十一年三月三日）

圖の中央方錐形の建築、或は寧ろ背の高い寶形造といった方がいいかも知れないが、これは外陣、つまり玄關にあたるので、本堂はここは半分見えてゐる。



一三五

一三五。 プバネスワー大堂　其三。

（昭和十一年三月三日）

本堂の完全な立面がここに見えてゐるが、惜しい事に灌木が生へてゐて、下の方がはっきりしない。内部はどうなってゐるか、到底伺ひ知る事はできないが、外陣の方は他の例によると、内部に通路があり、天井も兩方から石を積みだしてきて、自然に狹くして、上の荷重を支へる樣にしてある。全部入って見たわけではないが、多分皆同じであらう。

上、一三六。カナラック黒塔遠望。（昭和十一年三月四日）

下、一三七。同　全景。（昭和十一年三月四日）

私は宿屋から自動車で往復をした。案内書によると以前は時間もかかったし、轎で出かけるので、とても大袈裟であったさうだが、自動車のおかげでわけなく行ける。車は堂の所在地より歩いて十五分位かかる地點迄行く事ができる。私は正味三時間で達し得た。距離計に出た數字でみると、往復で一〇二哩。

黒塔と稱する建築はプバネスワー大堂の外陣と同樣、方錐形の建築で、これは本堂の方が壞れて了ったので、つまり座敷がなくて玄關だけといった形、年代は大凡西紀一二五〇年（建長二年）――一二六〇年（文應元年）にかけてのもの、日本だと鎌倉初期に當る。一三六では判らないが、一三七の左端に少し殘ってゐるのが即本堂の下部で、これが一三五の樣に背の高い特殊の外觀を呈する樣に殘ってゐれば申分はないのである。この外陣の方も、このままにしておいては危（下へ）

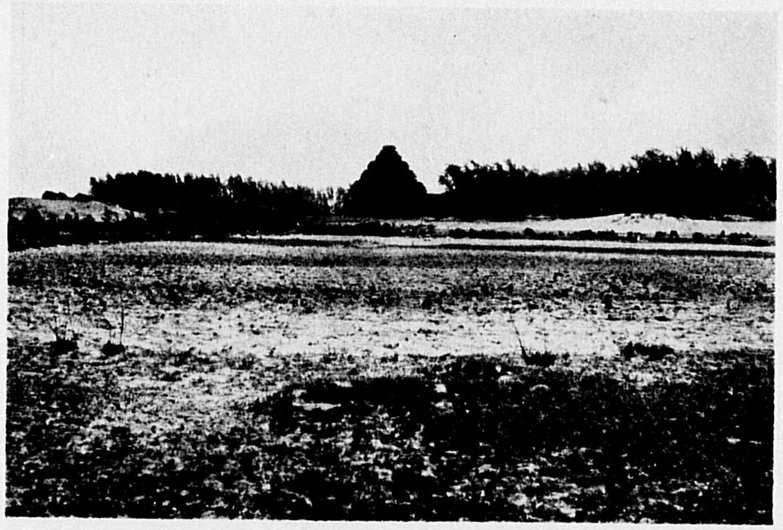
（上より）險といふので、一九〇三年（明治三十六年）に大修理をして內部に砂と小石とをつめてしまった。せめて外陣だけでも永久に保存しようといふところから、英斷を下したものと見える。

北印に於ける印度教や耆伊那教の殿堂は、特有な塔式高層建築を有するので、他のものと直に區別する事ができる。即シカラ（Sikhara）又はビマナ（Vimāna）と呼ぶもので、四壁は頂上に近づくに從ひ少しく內方に曲線形をなし、最上部に平たい環形の石をのせる、これをアマラカ（Amalaka）と呼ぶ。其一例は一三五に見る如きものだが、此場合には遂に完成されなかったとの事である。併し其一部は存してゐた事があったといふ。

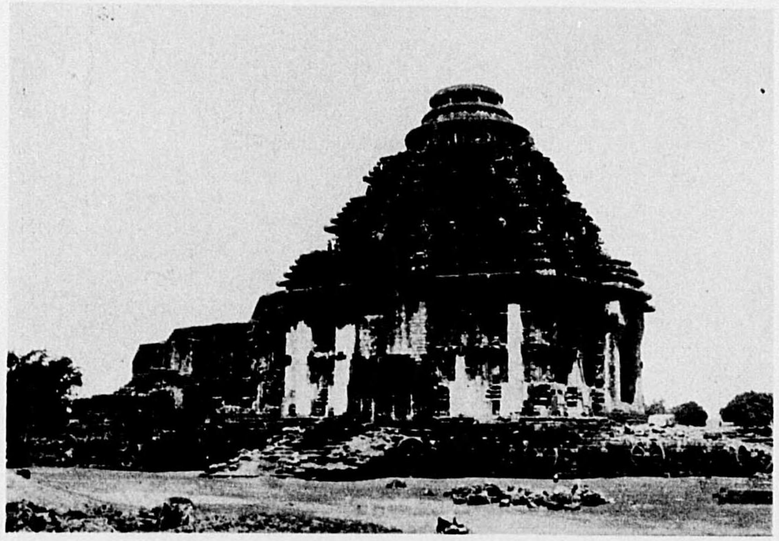
TO PRESERVE THIS SUPERB SPECIMEN
OLD INDIAN ARCHITECTURE
THE INTERIOR WAS FILLED
BY ORDER OF
The Hon'ble J.A. Bourdillon C.S.I.
LIEUTENANT GOVERNOR OF BENGAL
A. D. 1903

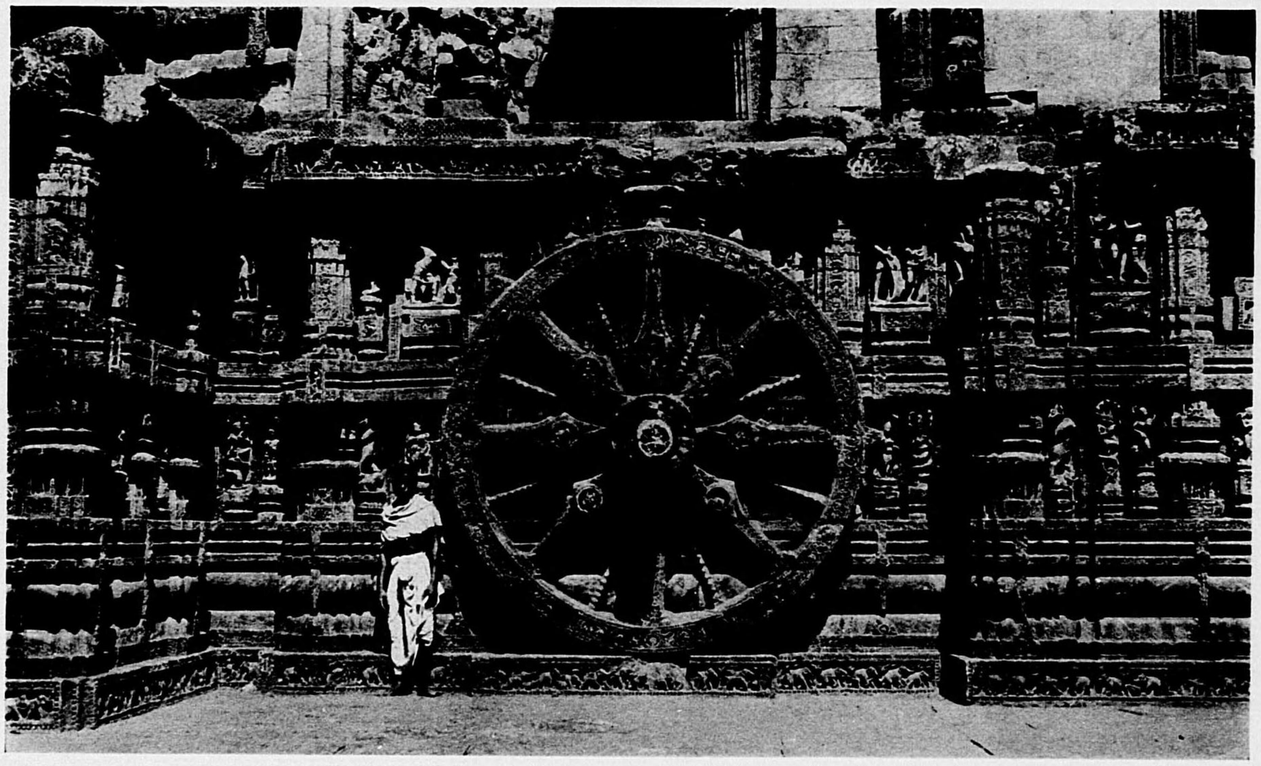
黒塔修理銘文
（昭和十一年三月四日寫す）

一三六



一三七





一三八。 カナラック黒塔部分。

（昭和十一年三月四日）

前圖に車輪が多く刻んであるのが見えてゐるが、此圖には其うちの一つを大きくし、傍に立ってゐる人物と比較して、夫が如何に大きいか、大體想像がつく樣にしておいた。圖でみる如く隨所精巧な彫刻を以て塡めてあるから、シカラ即本堂が大部分あった時分の立派さが推定できるであらう。ファーガッソンが一八三七年（天保八年）にここへ行った時は、本殿の大部分は未だ殘ってゐたさうで、印度建築圖集（Picturesque Illustrations of Indian Architecture, Pl. iii）に載せてあるさうである（Ind. Arch. Vol. 2, p. 105, ft. nt.）。

ブバネスワー大堂の玄關の屋根は**一三三・一三四**で明かなやうに二層で、下層は九、上層は七重にしてあるが、黒塔では三層にしてあり、下層は六、中層も同樣に六、上層は五重にしてある。さうしてファガッソンは全印に於いて、この堂の玄關の屋根に比べて勝る樣な意匠を見た事がないと激賞してゐる。

ブーリに於けるジャガナート堂（**一三九・一四〇**）を「白塔」と呼ぶに對して、これを「黒塔」といふとか。其昔シカラがあった時分は、英船の航海に水夫がいい目標にしたさうである。其建築の年代に就いても多少の說がある樣であるが、第十三世紀の中葉といふ點に於いては一致をしてゐる。日天に捧げた殿堂としては、最大最美なものとして異議はない筈である。

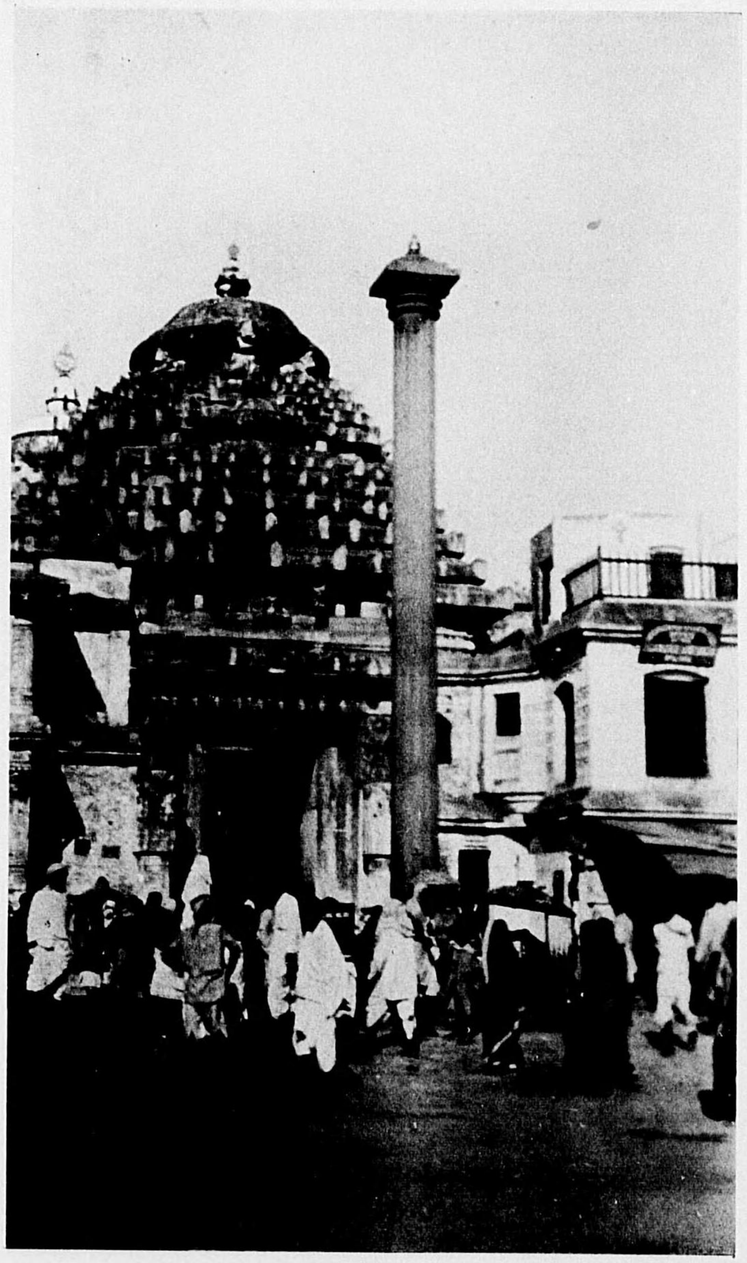
（昭和十一年三月三日）

一三九。プーリのジャッガナート堂　其一。

プーリの驛から少しくはなれ、海岸に美しい宿屋がある。B・N・R・(Bengal Nagpur Rly.) ホテルといふ。正にシーサイド・ホテル。前以て豫約さへしておけば泊るところに困る事はない。この宿屋からプーリの町は左程遠くない。この町には名高いジャッガナート (Jagannath, Jugnurnath) 堂といふのがある。ジャッガナートとは梵語で「宇宙の支配者」といふことださうな。案内書にはD・B・から一直線に約一哩とあるから、歩いても知れたものである。

此堂は長六五二尺、幅六三〇尺の殆ど正方形の地を占め、四方は高き石壁を以て圍み四方に門を開くが、印度教以外の異教徒には一切開放されてゐない。併し東門の東南隅の民家の屋上からみる事ができるが、いくら雙眼鏡で覗いても、見える所が見えるだけで大して效能はない。地域は六七〇尺に六四〇尺と記したのもあるが、測定の仕方によって異るのか、其邊は判然しないが、とにかく廣大な外郭の内に、更に四二〇尺に三一五尺の一區域があり、其區域は二重の壁を以てかこまれ、同じく四方に出入口を設く、この區域の中心線上に本堂と玄關と、更に其前にブバネスワー大堂に於けるが如く、後補の二堂が建ってゐる。本堂をバラデワール (Baradewal, Bara-Dewal)、玄關をジャグモハン (Jagmohan) ともジャガモハン (Jaganmohan) ともいふ。前者即本堂即内陣は方八〇尺、高一九二尺、玄關と共に奥行の長一五五尺あるさうである。

一三九は東門前をみたところであるが、其前に柱が一本たってゐる。此柱はカナラックの黑塔（**一三六**―**一三八**）から移したもので、上には迦樓羅天の座像があると書いてある。あるには確かにあるが正面の方は見えないし、はっきりしてゐないけれども、翼をひろげてはゐなかった。**一四〇**は東南からの眺めで、左端は本堂、其頂上のアマラカから上の装飾に餘程特徴がある。即玉子の様で上を尖らしたものの上に法輪の様なものがのり、其上に旗が飜ってゐる。シカラはどこにあっても同じだから、其例のジャガモハンと共に、遠方からも一見明かである。この堂の本尊といふのがとても變なもので。形もはっきりしてゐない混沌たる木片だといふ。遠近人民の信仰の中心ださうで、一年の賽錢十五萬ルーピーに達し、無理をしてまで賽錢をだすので、殆ど總てが產を傾けて了ふさうである。此神の祭禮の時は、其本尊の乘った車が町を練り、大變な賑ひ方だとの事である。



一四〇

一四〇。ブーリのジャッガナート堂　其二。

（昭和十一年三月三日）

解説前前頁にあり。

一四一。ビジャプールのゴル・グムバーズ全景。　（昭和十年十二月十六日）

孟買をマドラス・メイルで前夜二二時にでると、次の朝ホトギ(Hotgi)驛につく、乘換ると六つ目がビジャプール(Bijapur)驛で、一〇・五〇につく。當時の時刻表はこの通り、洵に時間に無駄がない。恐らくいつになっても、このやうに好都合な汽車があるだらう。ビジャプール驛に近づくと、線路の右手にいろいろのものが見えるが、其うち特に目立つのはゴル・グムバーズ即ムハマッド王の廟である。格別な恰好をしてゐるので、一目に夫と知れる。壁は先づクリーム色の樣な莊重な建築で、他で見られないもの。公立宿舍は舊城內遺跡散布區域にあり、ビジャプール滯在三日間、毎日必ずこの廟へ趣いた程、感銘の深いものであった。

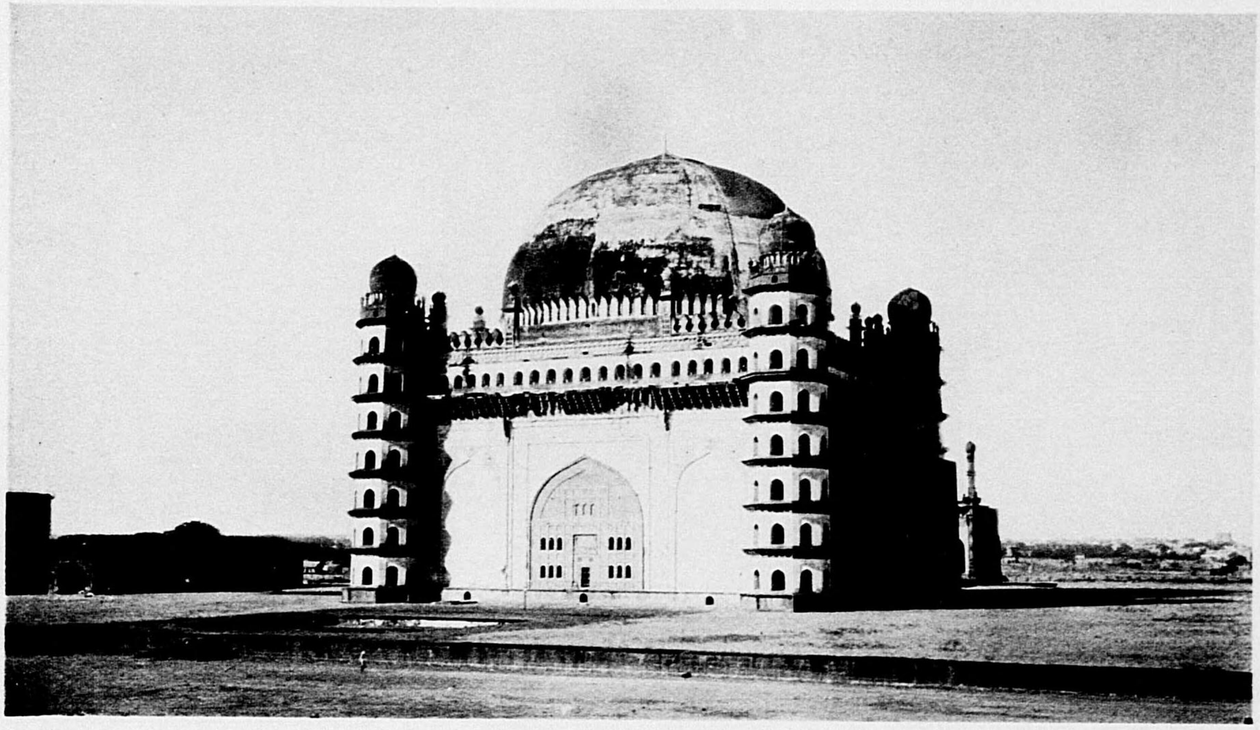
*　*　*　*　*

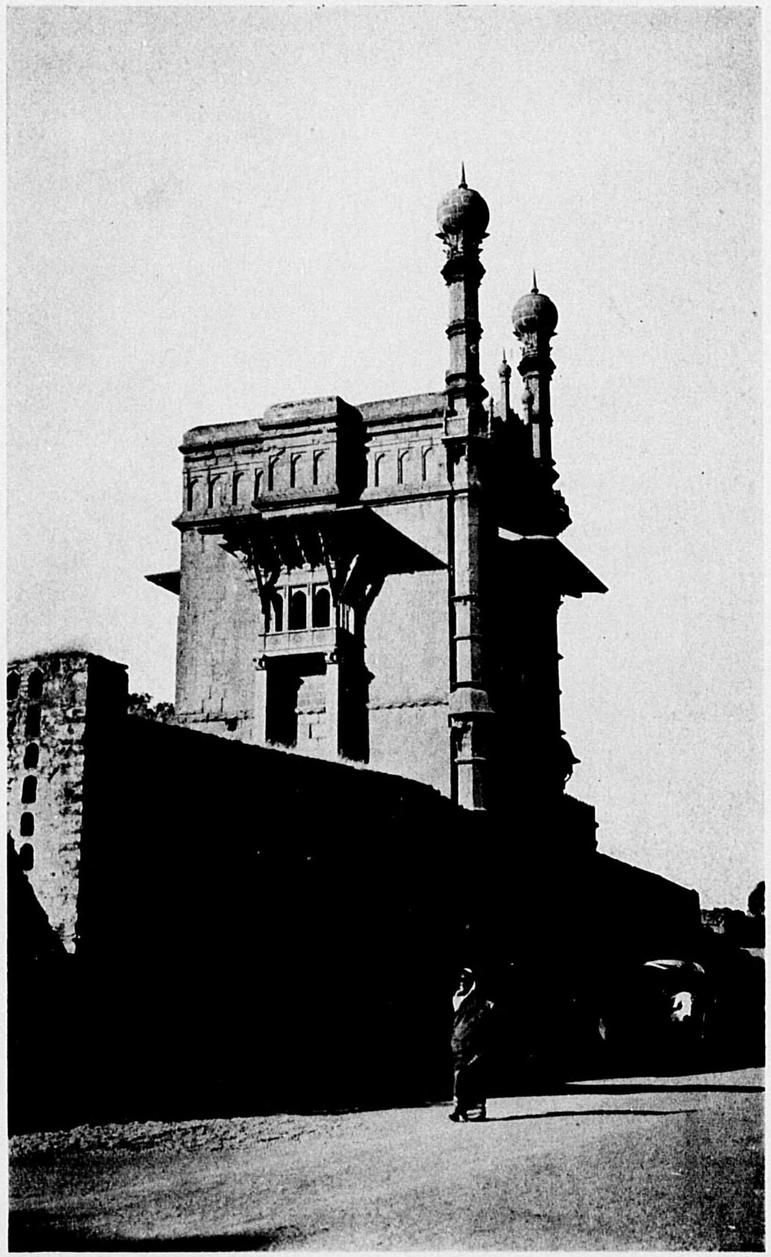
ゴル・グムバーズ(Gol Gumbaz)の「ゴル」とは圓形、「グムバーズ」とは圓屋根といふペルシャ語ださうな。ビジャプール王國第七代の王、ムハマッド・アヂル・シャー(Muhammad Adil Shah)(一六三六年(寛永十三年)—一六六〇年(萬治三年)の廟墓で、方形の平面を有し、外法一九六尺、內法約一三五・五尺、圓屋根徑約一二五尺、軒高地盤より約一〇〇尺、圓屋根頂上迄約二〇〇尺。四隅に八角塔があり、階段で屋上に登れる樣にしてある。さうして背面には、同じく八角形の突出部がある。此西方に東面してモスクが附屬してゐる。圖は東東北方からみたところで、東面の大部分と、北面(八角形の突出部のある)が少しと、其後ろから西方のモスクの東北隅の光塔とが見えてゐる。

方形の平面の建築に圓屋根をかけると、四隅に大きな弧三角ができる。この三角の部分を隅弓(グウキュウ(Pendentive))といふ。東羅馬建築等には、例へばアヤ・ソフィヤの樣に、時に非常に大きな隅弓ができる。然るに此場合には、まことに巧な方法を用ひ、而も手際よく取扱ってある。即床上五七尺のあたりから、うまくこなして徑九七尺の圓形にまで縮め、この上に前記の樣に徑約一二五尺の圓屋根を架けてある。この建築の造り方はいろいろ研究してみると、實に行屆いた方法をとってゐるのである。

西方にある東面せるモスクは、相當の規模を有し、又傑作である上に、屋上へも出られるから、そこから本廟の觀察もできる、忘れないで見學が必要である。

一四一





一四二。 ビジャプールのミハタリ・マハル全景。

（昭和十年十二月十七日）

ジャーミ・マスジドの西方約七町、城寨との間に北面して、ミハタリ・マハル（Mihatar Mahal, Mihtar-i-Mahall）といふきゃしゃな門がある。ミハタリ・モスクと呼ぶ小さい大して重要でない回教寺院への入口の門である。實は裏と左側面（西側）との窓が最も賑かだから、西南隅からの寫眞がいいとは思ったが、往來からの景、正面の有樣、特有の隅塔を見せるため、東北隅からのにしておいたのである。賑かな方杖で、きゃしゃな庇を支へたきゃしゃな窓は、北と東とに一つづつ、西に二つ、南にも二つだが、出入口の庇共三つだから、南側は相當に込み入ってゐる。

方二十四尺、三階建。窓の方杖は透彫のものがある、水鳥の模樣等を用ひてあるから、見てゐても興味のつきぬものがある。此門の建築年代は凡そ一六二〇年（元和六年）の頃として、大して誤りはあるまいといふ事である。此建築は印度式と回教式との混合であり、殊に階上露臺の窓は正に此種の驚異である。

一四三。 ビジャプールのイブラヒム・ラウザ全景　（昭和十年十二月十六日）

ビジャプールの城壁の西門外、六七町をへだててイブラヒム・ラウザ(Ibrahim Rauza)の一廓がある。公立宿舍から馬車で樂に往復ができる距離だから、見學には甚だ便利である。ラウザとは庭園といふ意で、時に人によっては墓といふ意味に用ひるといふ事が書物にかいてある。イブラヒム二世(Ibrahim II='Adil Shah)の大傑作だといふ批評がしてある。

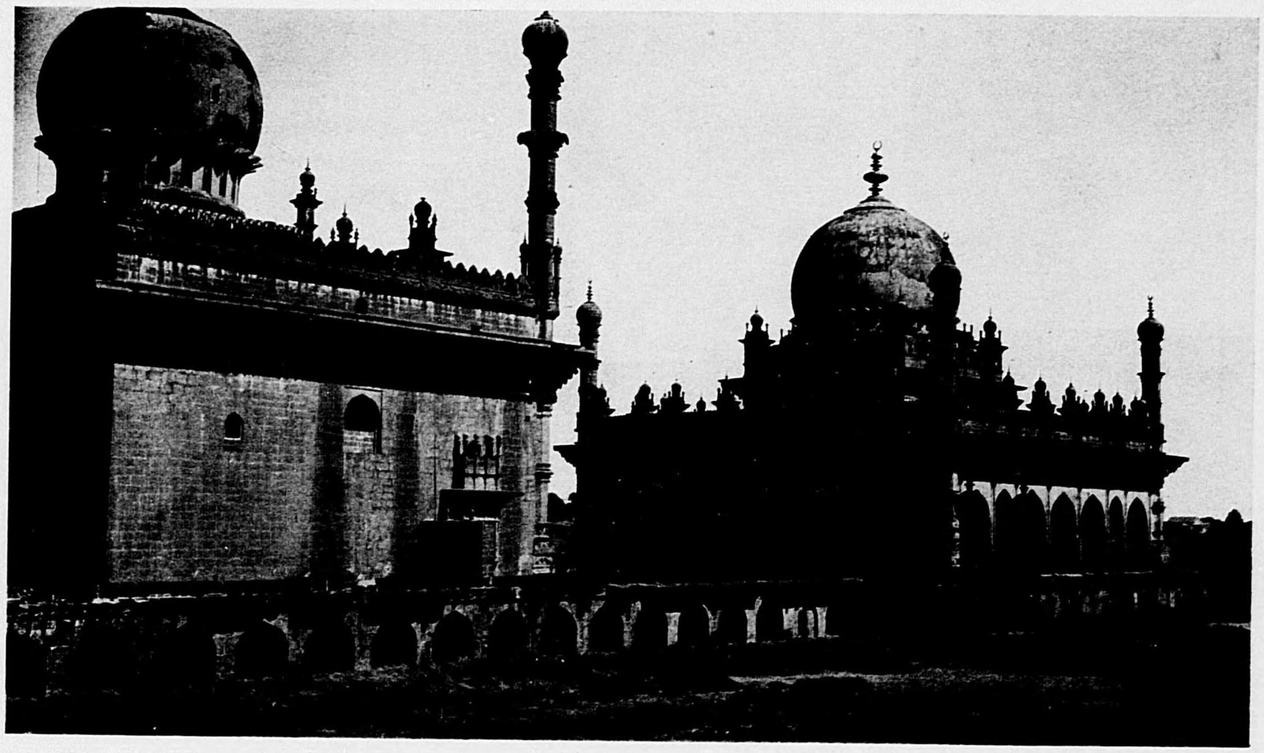
*　*　*　*　*

廟は道路より少し南に入ったところに門があり、方形の廣大な地域を占めてゐる。東西約四四〇尺南北約四五〇尺、つまり一町十三間に一町十五間の場所に、東に廟、西に回教寺が、夫夫西面及び東面して建ち、間に貯水池があり、この南方及び北方に、及び回教寺の西方即裏に廣場がある。廟と寺と建ってゐる所は、他より少し高い。圖は西南の廣場からとった全景で、右が廟で左が寺、廟の左側面と、高地周圍の尖拱及び勾欄が見えてゐる。午前中で太陽が東南方にあったものだから、廟の正面は惜しい事にかげになってしまった。

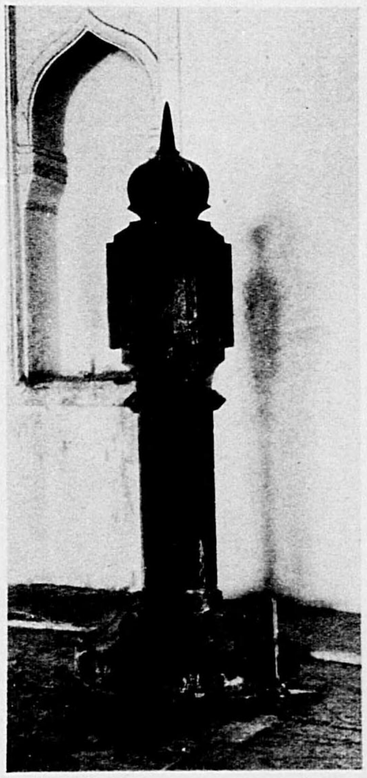
イブラヒム二世(一五七六年(天正四年)—一六二六年(寛永三年))がここに建築した廟は、大さ方一一六尺で、比較的規模は小さい方である。外郭は方七間、柱間には尖拱があり、更に其内部に一段高く方五間の通路があり、さうして其内部に墓室がある。墓室は方約四十尺、石の折上格天井、墓は東西に一直線に六基竝んでゐるが、傳説によると、東から西へ順にイブラヒム二世妃・母・イブラヒム二世・娘・息子・息子のだといふ。二重から上は、他と同じ樣な巧みな方法を用ひて高い圓蓋を支へてゐる。

外部四隅に細長な光塔があり、各面共隅塔との間に八基の小塔がある。更に内部墓室の壁の四隅にも小塔があり、小塔の四隅にも亦更に小塔があるから、全體としては可なりの數に上る。例へば廟の外郭軒上の小塔だけでも大小三種あって、總數一六四基となる。其他寺にも隨分多い上に、此等が何れも特徴のある型式だから、特に目立ってゐる。其他正面の門・噴水・石段親柱等、皆注目に値するものばかり、墓室北面出入口上銘文の終りの行に1036 A. H. とあり、即西紀一六六六年(寛永三年)に當る。南出入口の上には一六三三年(寶永十年)の文字ありといふ。

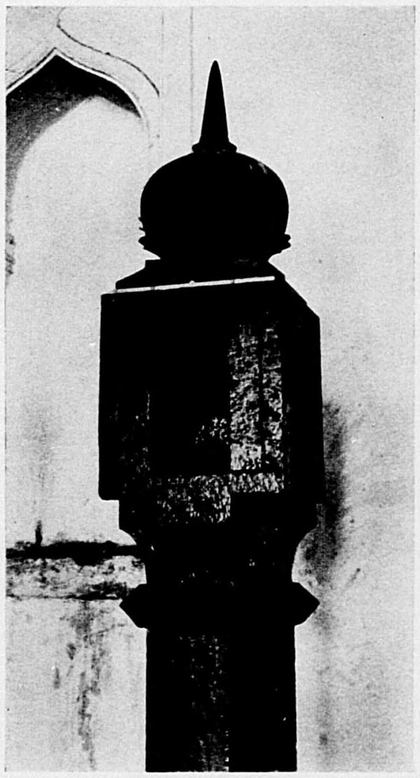
一四三



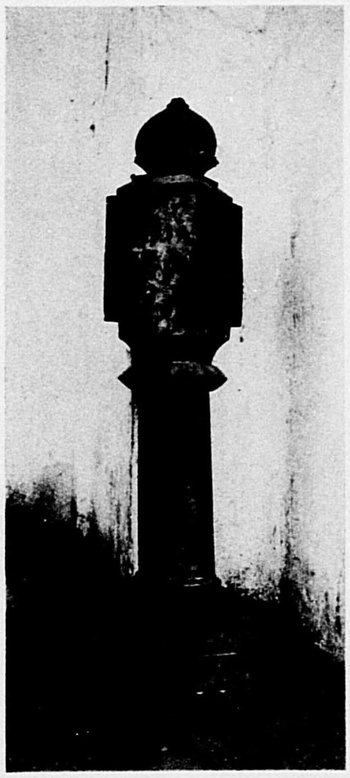
一四四



一四五



一四六



右、**一四四**。ビジャプールのジャーマ・マスジド内石燈籠正面。

（物差は曲尺の一尺・昭和十年十二月十六日）

中、**一四五**。同　石燈籠部分。

（物差は曲尺の約一尺（一呎）・昭和十年十二月十六日）

左、**一四六**。アサール・マハル内石燈籠背面。

（物差は曲尺の一尺・昭和十年十二月十五日）

ビジャプールのアサール・マハル（Athar Mahall）を見學の際、其地階で池に面した吹放しの一室の一隅で、私は初めて石燈籠を見た。此建築はアサール・ムバラック（Athar Mubarak）ともアサール・シャリフ（Athar Sharif）ともいひ、マホメットの髮を安置してあるといふ、仍て「遺物の宮殿」といふ意味ださうな。元はダード・マハル（Dad Mahall）として一六四六年（正保三年）の頃に建築されたものだとの事である。案内書にはアサリ・シャリフ（Asari-Sharif）としてある。

其石燈籠は墓の前にあったが、場所の關係上背面からでなくては寫眞がとれなかった。ところが翌日はジャーミ・マスジド（Jami Masjid）即回教寺本堂内に於いて右圖の様なものを見つけ、夫が前日のものと全く同じ意匠より成ってゐたので、更に火袋から上を大きくとり、ここに掲げて細部の手法を知るに便ならしめておいた。

中臺と笠とがないだけで、上の寶珠の如き、どう見ても回教式である所に興味がある。私は印度に於いて見學の最初に石燈籠を見た事を非常に喜ばしく思ったが、後にグワリヤ市の回教墓（**三三—三五**）及び南印チンネヴリの大堂の入口の傍（**一六五**）で、同じ様なのを見るに及び、印度にも亦石燈のある事を知り、もう少しさがしたら、もっと珍らしいのが見つかりはしないかと思った。ここに掲げたものに回教式の中臺と笠とをつけたら、甚だ面白いものができるだらう。いつか描いてみようと考へてゐる。

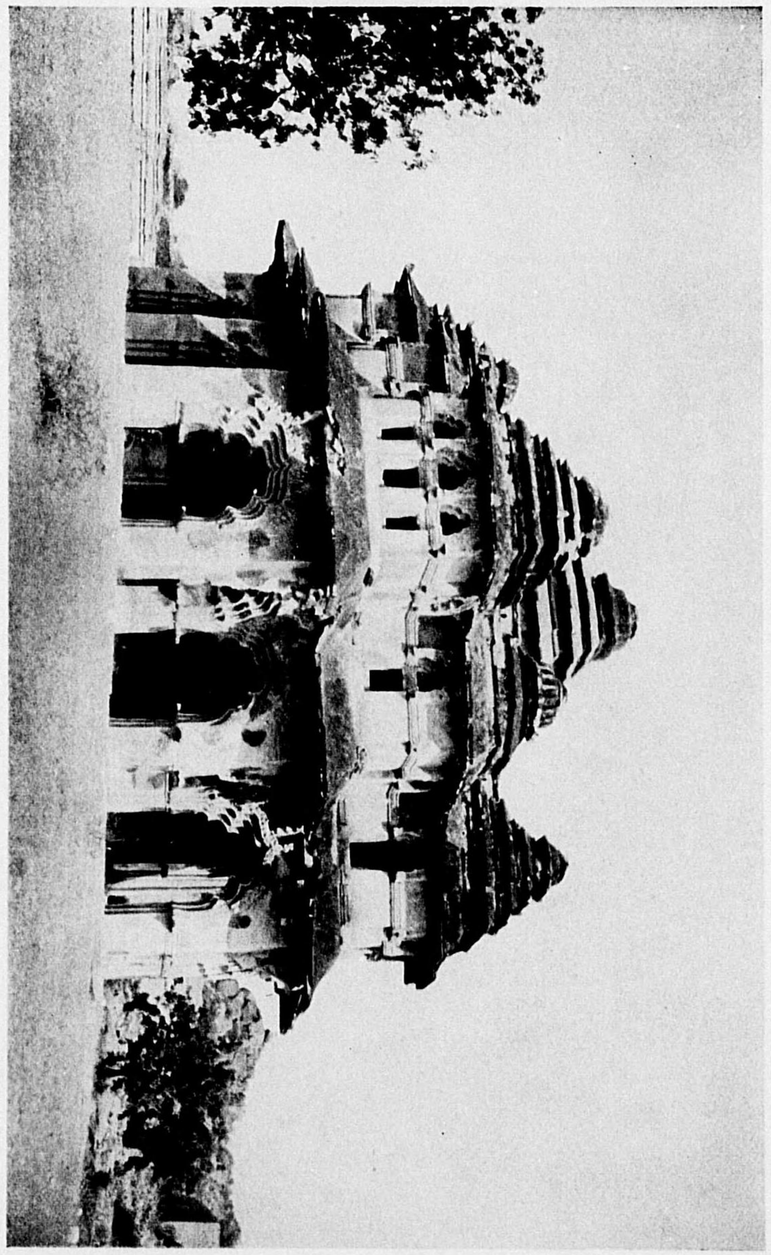
ハムヒ(Hampi)といふのは、昔のビジャヤナガール(Vijayanagar)王國の首都のあつた所。

*　*　*　*　*　*

この國は西紀一三三六年(延元元年)から、ともかくも一五七〇年(元龜元年)まで、二百三十四年間南印に君臨したので、南はカマラアール より北はマンガ、ートラ(Tungabhadra)河對岸のアナグンディ(Anagundi)に至る、約九千方里の地に、往時を偲ぶに足る遺跡が散布してゐるのである。何はともあれ、ト驛からカマラアールの村へ行く途に、道中いろいろ見るべきものが殘つてゐる。ここも亦、少なくとも一週間滯在してゆつくり見なければ、先づ何にもならない位、多くのものが殘つてゐる。

*　*　*　*　*　*

今茲には圖に制限があつたので、ほんの一例を掲げておく。其一は公立宿舍から約一哩を距てる後宮の一郭に建てる構圖で、本名がどうだか知らないが、【ハムヒの廢墟】と題した書物には、ロータース・ハ(Lotus Mahal)蓮花宮)とある。正方形の各邊の中央から、方形の部分を突出させた樣な、つまり正方形と十字形と組合せた樣な平面を有し、初重は吹放しで柱間は總て花頭形とし、階上も亦上部が花頭に終れる小窓を適當に壁面に設けてゐる。內部は初重に格天井があつたり、隅々に隅迫持があつたりして可なり面白い。回教式と印度式の折衷建築。



一四七。ハムヒ廢墟の樓閣。
(昭和十年十二月九日)

昭和十年十二月十七日二時に、ビジャヤナガール驛へ行き待合室へ入れた。さうして十八日二・二六ビジャヤナガール發の汽車で南下した。十八日八・二六カダグ(Gadag Jn.)着　一一・四九　カダグ發　一三・五キスベット(Hospet)驛着　馬車で七哩行つてカマラアール(Kamalapur)といふ所へ泊つた。

汽車の時刻は右に記したもの以外に、當時は都合のいいのがなかつた。カマラアールにあつた公立宿舍は、この日滿員で泊る事ができず、村にあるある家のやうなものを借り、もかくも一泊した。食料は米も副食物も味噌も醬油も何も彼も、煮炊きするような煙爐迄、一通りは持つてゐて、從僕が食事をつくつてくれるから、食物の心配はない。幸に一夜で公立宿舍は全部あき屋になつたので、十九日ここに移り、二十日滯在、二日間でこの遺址の見學を了ふる事ができた。

*　*　*　*　*　*

一四八

一四八。ハムと廢墟の象徴。

（昭和十年十二月十九日）

前記後宮の一郭の東北隅から東方に出ると、眞正面に眞西を向いて大きな立派な細長い建築がある。國でいうとほり殆ど純粋といってもいい位回教式の勝った建築。內部は十一の大室があり何れも圓蓋を架けてあるが、中央塔のみ方形で、上部は壊れて了ってるか、恐らくは前圖に見る様な印度式の屋蓋を有してるたのではないか。

ら、當初の形は判然しないが、

なぜ「象厩」といふのは、王室の象をつないでおくための建築だといふ傳說があるに過ぎないので、實は象をつなぐ設備は見當らない。

一四九。 ママラプラムのシヨーア・テムプル遠望。

ママラプラムの遺跡見學のため、私はマドラスから五十三哩を車で往復した。行くには色いろの方法があるが、私のとった方法が最もよろしいようである。マドラスは當地 Mamallapuram から北に、他に Mahabalipur, Mahavellipur, Mavallipuram, Mamalaipuram 等もいひ、又タミール語では Mahabalipuram, Mamallapur, Malaipur 等とも書く。この最後の語から Mammalapuram とも書かれてゐる。遺跡のあるところには小川を渡らなければならないが、マドラス市を此小川の間を、車で走りつめた二時間半かかる。川を渡るのには毎日午前八時から十八時迄、いつでも渡船があるから困らないが、公立宿舎は前以て手紙をして承認を得てからないと、たしめけに行つたのでは泊れない。但し食事はつくつてくれないから、食料を持參する事が絶對必要である。

* * * *

ママラプラムの遺跡は、其大部分がママラ（Mamalla）即ちパルラヴァ王 Narasimhavarman I（西紀六三〇年—舒明天皇二年—六六八年）天智天皇七年）の時代に生く拔きの岩を切りとつて造たもので、建築をしたのではない。尙ほこの王の時代には謂はゆるラタ（Rathas）を刻うたしたのができた。「ラタ」とは今でも祭禮の時に使用されてゐる車に似てゐるので、かく呼ばれてゐるのである。ナラシンハヴァルマン王は、パラヴァ（Pallava）王朝第三の王で、此王朝はシムハヴィシュヌ（Simhavishnu）王（約西紀五七五年—六〇〇年）からパラメスワラヴァルマン二世（Parameswaravarman II）（約後七一五年—七一七年）迄七代、其首府はカンチ（Kanchi（現在城））即今のコンジーヴェラム（Conjeeveram）にあつたのである。だからママラプラムの石窟は總てパラヴァ建築の好標本である。

* * * *

圖は海岸にあつて、而も他の石窟が、前述の樣に何れも自然の岩から刻みだしたものなのに、このシヨーア・テムプル（Shore Temple）のみは、石を重ねて建築したものである。（一四九）

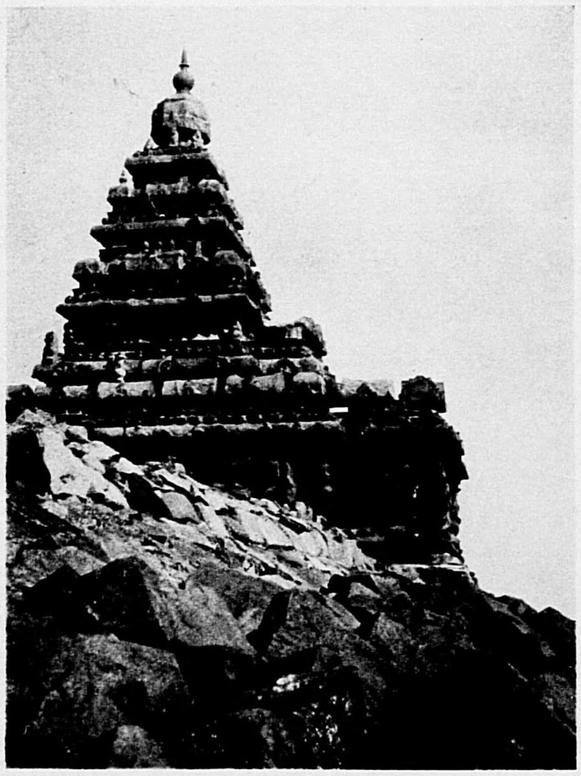
此點に於いて珍らしい。コンジーヴェラムに於ける一つとされてゐる。

尙に、ナラシンハヴァルマン二世の時代の傑作の

一四九

一五〇

一五一



右、一五〇。ママラプラムのショーワ・テムプル近景 其一。

左、一五一。同 其二。

（兩圖共昭和十年十二月二十四日）

此建築がナラシムハバルマン二世の時のものといふ事は既に記したが、此王は一にラジャシムハ（Rajasimha）といひ、西紀六九〇年（持統天皇四年）—七一五年（靈龜元年）の人、だから日本だといふと、丁度奈良時代初期のものといふ事になる。

ママラプラム普通名稱を「七塔」（Seven Pagodas）といふ。傳說によると、此地所在の七塔のうち、今日に殘存してゐるのは、このショーワ・テムプル一棟のみである。尙ほ時折は他の六塔の頂上が、海面下に見えるといふ口碑もある。ラジャシムハ王晉て昇天して因陀羅即帝釋天に謁した時、首都を一層華麗にし、美觀都市たらしむる事を願ったが、餘り美しくしすぎたので、帝釋天の嫉妬心から、大暴風雨を起してさしも美しかった都を破壞してしまったと。傳說は傳說として、他の六塔其他の基礎らしいものは見當らないが、彫刻した石材の破片は海岸に散布してゐる事は事實であるといふ。

一五二。 ママラプラムの謂はゆる「アルジュナの苦行」部分。

小山の東面露出せる大岩の面に、神像・人物・動物・殿堂などを、殆どすき間のない迄に刻んである。（昭和十年十二月二十五日）

これを俗稱「アルジュナの苦行」(Arjuna's Penance)と呼んでゐる。丁度大きな岩が、僅に間をおいて竝んでゐるその自然の裂隙を中心として、左右から此の割れ目の中心に向って彫刻した、頗る復雜した意匠のもの。これは一體何を現はしたのかといふ事に就いて相當の議論があるので、實は何を刻んだのか、はっきり判ってゐない樣である。

一說に大岩の裂隙はガンジス河を現はしてゐる。ガンジス河に就いて神話があって、つまり此神聖な大河が天から地に流れて來たのを、地上のあらゆる生物が其流れ即ち裂隙の方へ向って來たところを現はしたとするのである。人物は勿論、大象・鹿・野猪・熊・猿・龜・鳥・等等、何れも夫婦雌雄が恒河を禮拜するために、中心に向ってゐる。これは裂隙にナガ・ナギニ・眼鏡蛇等が刻んであるのは、水の崇拜を意味してゐるので、半人半蛇の那伽は常に水に緣のあるのでみても、さう考へられる。だから此彫刻を「恒河の由來」(Descent of Ganga)ときめてゐるのもある。

一五二

一五三。 ママラプラムの五「ラタ」全景。　（昭和十年十二月二十四日）

ママラプラムの遺跡の最南端に「ファイブ・ラタス」(Five Rathas)と名づけてゐる石造建築の一群がある。建築といったのは實は便宜上のことで、シューワ・テムプルの様に石を集めて建てたのではなく、自然に露出してゐた大岩を切り開き削りとって、家屋の形に造りあげたもの。大變な手間とひまとかかった仕事である。此等の諸堂に就いては、こじつけ説もあるが、要するにシバ即大自在天及び其眷屬を祀った堂と推定し得るのである。果してさうなら「シバ」(Siva)、配遇者の「パルバチ」(Parvati)、其子の「ガネサ」(Ganesa)と「スブラマンヤ」(Subrahmanya)、夫から侍從長格の「チャンヂケスワラ」(Chandikesvara)だといふ説がある。

*　*　*　*　*

圖は五堂のうち四つ寫ってゐて、最も南端のものは場所がなくて入らなかった。左から順にサハデバ・ラタ(Sahadeva's Rathas)、次は象がゐるが、其次即象の右がドラウパヂ・ラタ(Draupadi's Rathas)、次は「アルジュナ・ラタ」(Arjuna's Rathas)、其右即特殊な切妻造の屋根をもった最大のが「ビマ・ラタ」(Bhima's Rathas)、以上四棟。さうして五つ目即最南端のは、寫眞にでてゐないが「ダルマラジャ・ラタ」(Dharmaraja's Rathas)といってゐる。

「サハデバ・ラタ」は、屋根が半圓穹窿式だが、後端即北の方は圓くなってゐるので、つまり佛教の制多(Chaitya)式になってゐる。つまり北端はアプス(後陣)にしてあるし、其他細部に面白い點が多多ある。次の(ドラウパヂ・ラタ)は寶形造の小室だが、屋根は照らす反對に起りがある。其次の「アルジュナ・ラタ」は「ダルマラージャ・ラタ」と共に、大小の差こそあるが、最上部は椀を伏せた如くであるが、半球形でなくて稜線があるのと、割合に背が高いのが特徴なので、伏鉢型といふよりは水母に似てゐる。この水母はドラビタ建築の特徴と思へばよろしい。第四に數へた「ビマ・ラタ」は大原三千院本堂を思はせる舟底天井をむきだしにした様な穹窿式で、これが大發達をとげると、南印諸堂の大門の屋根に見る様な形になるのである（一六一・一六七等參照）。

一五四。 コンジーベラム市郊外カイラサナータ堂。

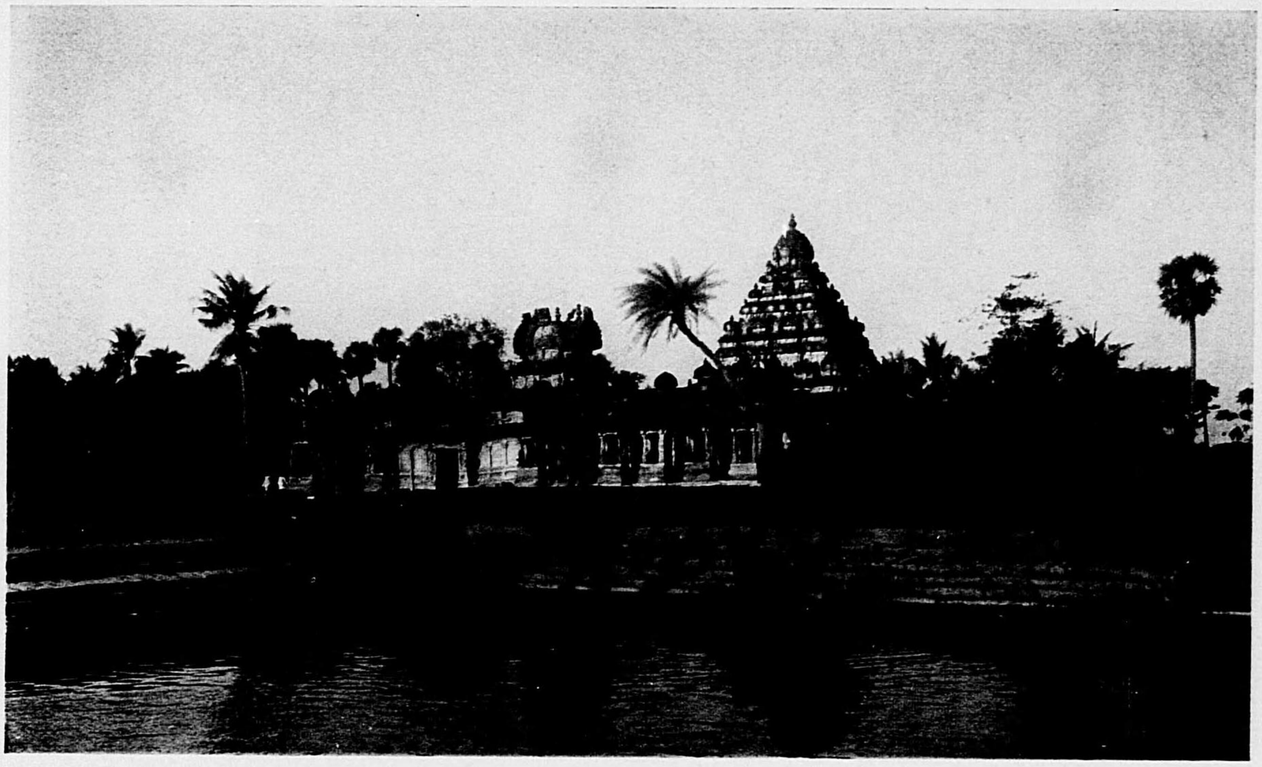
（昭和十一年一月十一日）

コンジーベラム（Conjeevoram）は古へのカンチプラム（Kanchipuram）で、【大唐西域記】に「建志補羅」・「建志城」とあるのがさうである。カンチプラムはパラバ王國（**一四九**解說參照）の首都であったのである。私はマドラス市から往復をした。尤も通り一遍の見物なら、マドラスから車を雇って行けば樂に日歸りはできるが、苟も此地に殘ってゐるパラバ建築をゆっくり見ようとするなら、泊らなければならぬ。泊るとしても宿屋はない。驛の待合室がうるさいとすれば、公立宿舍へ行くより仕方がない。ところが市中にあるのはP・W・D・のインスペクション・バンガローで、前以て手續をして承認を經てゐなければ泊れない。私はそんな事を知らなかったので、まごついたあげくの果に、郊外にある市の宿舍へ行って泊る事ができた。素より食事は自分でしなければならない。私の行った時はI・B・は空あきであったのに、手續がしてなかったので泊れなかった。甚だいちがわるくできてゐる。

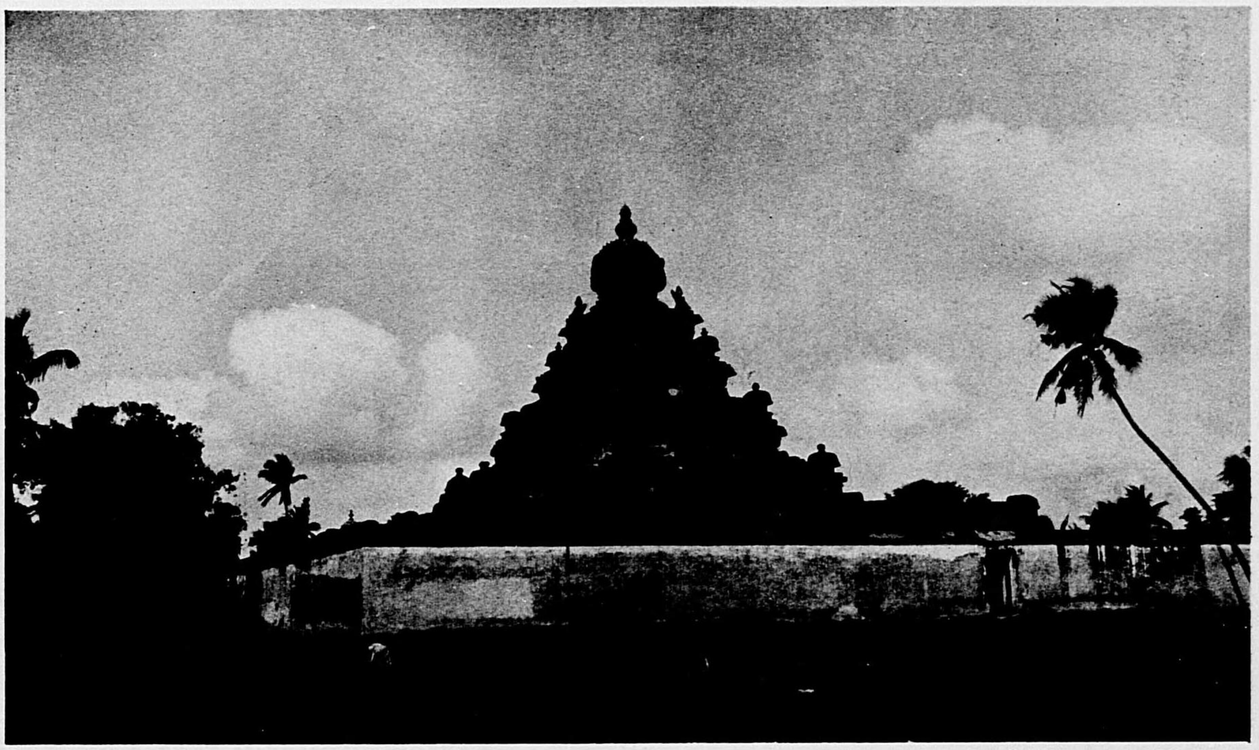
* * * *

パラバ建築の遺物の中、最も重要なものは、市の郊外にあるパラバ王ラジャシンハ建立のカイラサナータ・テムプル（Kailasanatha Temple）である。市のバンガローから遠くはない。現今は空屋で神樣は留守、だから內部は自由に見られるが、錠がおろしてあるので入る事ができなかったが、周圍を一巡してあたりの風光を賞し、翌日午前中にもう一度來る事にして去り、他の市內の新しいエカムバレスワラ（Ekambareswara）堂の見學をして、此日の日課を終った。

翌朝再びカイラサナータ堂へ行き、從僕を乘って行った馬車で番人の迎ひにやり、漸く內部の見學ができた。堂の正面から少し離れたところに石彫の神聖なる牛像があり、其向って右後方に、圖の右下に見えてゐる神聖沐浴池があるが、今は村人の洗濯場になってゐる。堂は圖の如く、正面正門の左右に數棟の小祠があるが、其屋根は、中央に大きく見えてゐる本殿の屋根と同じく「水母式」であり、其前方の小堂及び門の屋根はたとひ後世のものにせよ、ママラプラム石殿と比較して頗る興味があるであらう。境內外廓に沿ひ、此圖に見えてゐる樣な小祠が連續して建ってゐる。此內には元は隣伽を祀ってあったとの事である。



一五五



一五五。 ゴンジーベラム市バイクンタ・ペルーマル堂。

（昭和十一年一月十一日）

バイクンタ・ペルーマル（Vaikunta Perumal）堂は、カイラサナータ堂の正に東方に當ってゐる。「バイクンタ」とは毘紐天の樂土で、毘紐天はペルーマル（偉大なる神）と言はれてゐるのださうな。だから「大毘紐天堂」といふ樣な意味であらう。時代は前例と殆んど同じである。

・本堂の形はカイラサナータ堂によく似てゐて、屋根の頂上には大水母、段形をした部分には小水母、何れもドラビダ建築の特徴をよく現はした屋根がかけてある。前例では「前堂」と「本殿」との間に屋根を架けてしまったから、たとひ夫が後の仕事であるにしても、我國の神社建築でいへば、先づ權現造といふところだが、此堂では「前堂」と「本殿」と續いてゐるから、權現造とはいへない。併し前例と同樣に、パラバ式片蓋柱其他の細部が目につく。一五〇・一五一・一五三・一五四等と比較せよ。

り他で見られない特殊の景觀を呈してゐるから、たゝひ多くの殿堂が昔似たりよったりで、幾つみても同じだからうまらないといふ批難はあるかも知れないが、一日や二日はゆっくり見物の價値はある。

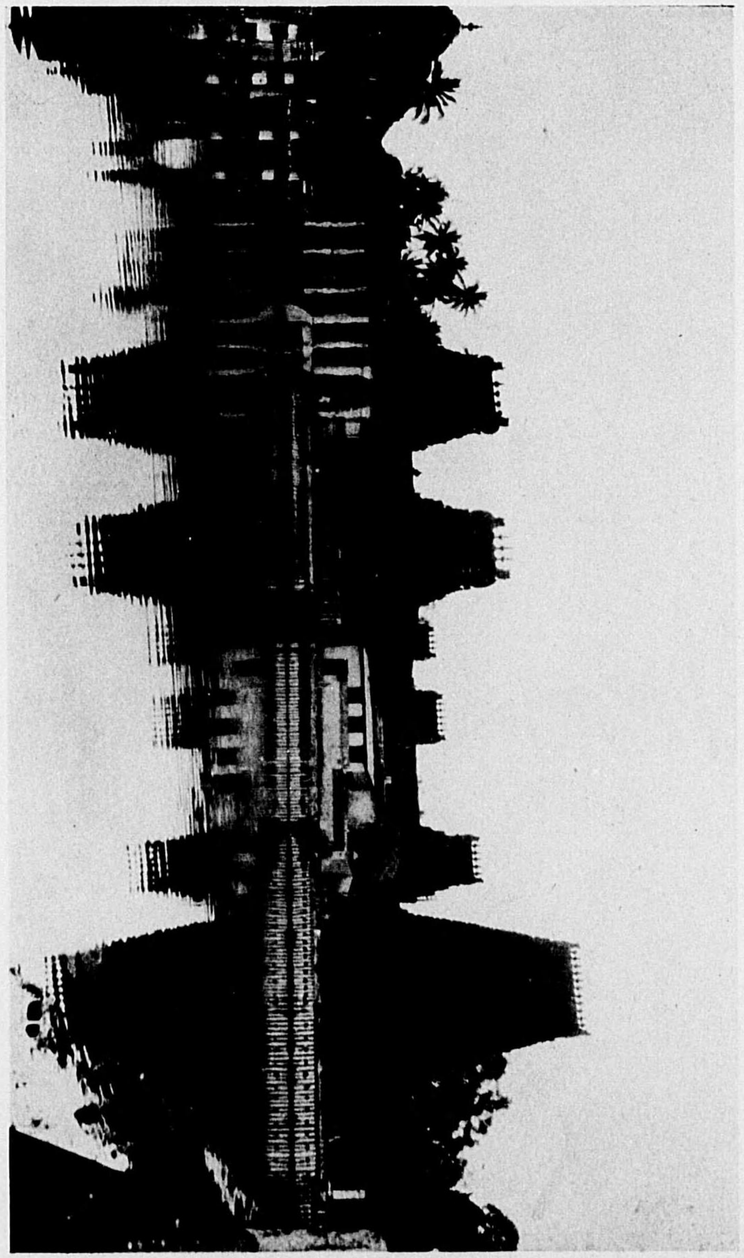
圖は市中にあるスハモカム沐浴池（Mahanoham Tank）で、この池の端を散歩するのは洵に心地がよろしい。晝は朝まだ暗いうちに此驛へ着いたので、その時から天候は大して面白くなかった。夫でも午前中は時に晴れて少しは日もさしたが、タンクの所では一面に雲って了ひ、折角こゝまで來たのに此樣にねぼけてしまった。殆ど日本人ならだれか行かないせいか、町を歩くと恰も見世物のように、人の顏をのぞき込むものもあり、いや氣がきしりし、南印地方はこの頃雨季のもち始末で、この殿堂も內部の觀覽は中中むつかしい。仕方なしこの午前中三時間半見物をしてやめにした。

夕クンクとコッラム（Coppum）は印象に深かった。

一五六。クムバコナムのマハコナム池。（昭和十年十二月二十五日）

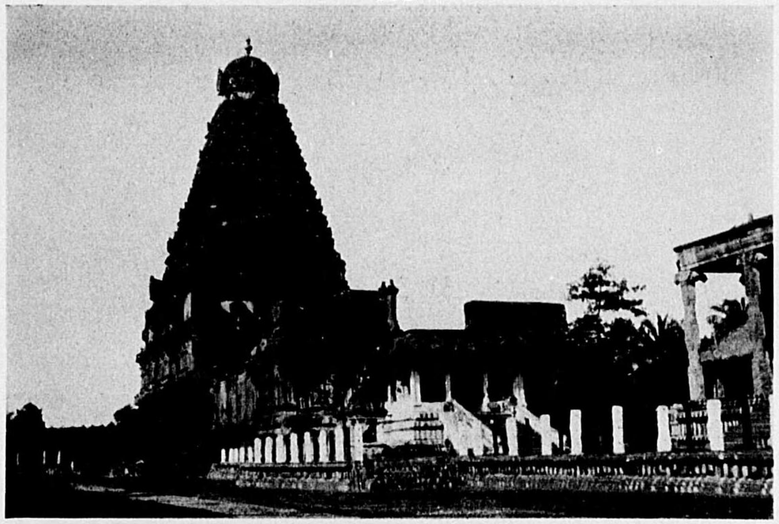
クムバコナム（Kumbakonam）の躍堂見學の日は不幸にして雲天であった。ここは往昔のチョラ（Chola）王朝の都であるが、大して古いものは殘っていない。寺は非佛の神等で飾てゐてたゞ大コッラムのもある殿堂見學のつもりで出かけたが、仔細あって目的を達せずに去ったのである。

此町にも泊るところは公立宿舍があるだけだが、廣い境內に建って居心地はよろしいし、市中にある沐浴池の周圍には、印度教の殿堂が多くてゐて、圖の樣な幽りの殿堂が多くの殿堂が



一五六

一五七



一五八

一五七。 タンジョーワ大堂。　（大正十二年一月十七日）

タンジョーワ(Tanjore)は南印の大都で、ここの驛は鐵道の分岐點になってゐる。驛の待合室にも泊れるし、町には大きな公立宿舍がある。此地ではチョラ(Chola)王朝が隆盛を極めたが、印度武人種族の一なるマーラッタ(Mahratta)の一人なるベンカジ(Venkaji)なる者、タンジョーワを降し、マーラッタ王朝を創立し、西紀一七九九年(寛政十一年)迄支配者の位置にあった。其後は佛・英等が交替で攻撃し、遂に一七七九年(安永八年)になってからは、領地の殆どすべてを失ひ、文字通り餘喘を保ってゐたに過ぎなかったが、夫も一八五五年(安政二年)、正系の男子なく時の王ラジャ・シバジ薨じ、其結果猫額大の領地は、自然英政府の手に歸してしまった。長期に亙り此地は南方に於ける美術・宗教・政治の中心であった。故に此地方の初期の文化及び印度式藝術は、重要なる位置を占めてゐるのである(案内書抄譯)。

一五七はタンジョーワに於けるドラビダ建築の最好例である。經過の年代も古く、驛の乘降廊からもよ(下へ)

一五八。 タンジョーワ大堂廻廊内の隣伽。　（昭和十年十二月十七日）

(上より)く見える。入口には高さ九十尺の門塔あり、更に第二の門塔を入ると廣大なる境内(八〇〇尺×四一五尺)に出る。周圍に廻廊があり、小室に分れ、各室に隣伽を祀る。**一五八**は其隣伽の數例を示したもので、蓮座の上に圓形で一方に流出口の樣な嘴の樣なものをだした、特殊形式の石があり(これにも意味はあるが略すとして)、其中央に此場合では上端に少しく膨みのある圓壔形の石をたつ。これはシバ神の表象で隣伽(Linga(m))といふ。印度では隨所に祀られてゐる。孟買に近いエレファンタ窟殿の内にも偉大な隣伽があるのを、知ってか知らないでか、墓標として記載してある(一二二頁參照)。

一五七は大塔に向って左前即東南方からの寫眞で、第十世紀の終り頃に着手し、大凡西紀一〇一二年(長和元年)の頃完成したと見るのが安全らしいとの說がある。勿論數多い修理は經てゐるが、比較的よく保存され、南印に於ける最古且つ最重要な建築の一たるを失はない。

一五九。 トリチノポリ市大岩。

（昭和十年十二月二十八日）

今を距る事正に五十年前、中學時代に夜學へ通って「クライブ傳」を敎はったが、そのなかに「ボンヂシェリー」と「トリチノポリー」といふ地名が幾つもでてきた。どうも餘り聞いた事がない名なので、珍らしかったせいか、この二つだけはっきりした記憶がある。以前この邊は汽車で素通りをして了ったが、今度は下車した。感慨無量といふ程でもなかったが、クライブ傳を稽古最中居眠をして、先生に本の上をたたかれて、驚いて眼をさました事を思ひ出したりした。

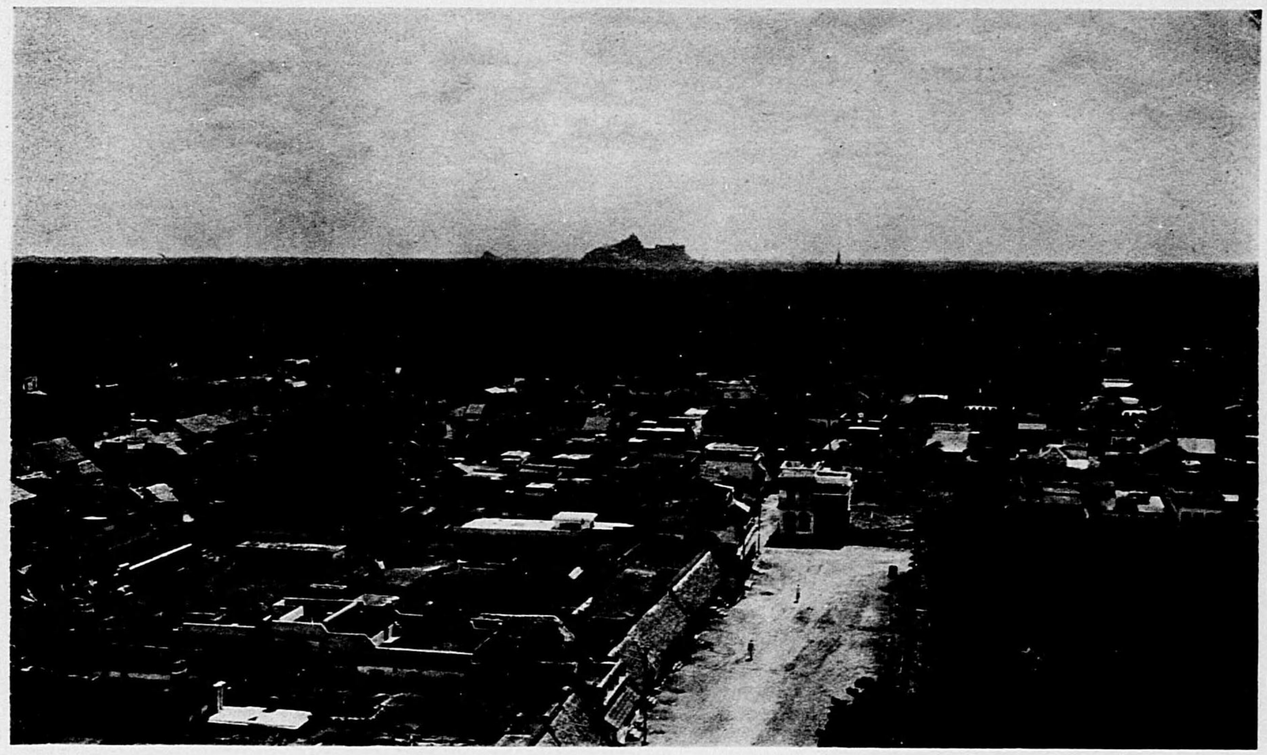
トリチノポリ(Trichnopoly)は大驛である。驛前にはタキシがずらりと竝んでゐた。公立宿舍は驛から隨分離れてゐたので、馬車で二十五分かかった。今では建て直したらうが、其宿舍は、クンバコナムとタンジョーワのが極めて美しかったのに引かへ、頗るつきの古物で貧弱甚だしく、而も表の方は屋根がいつ落下するか判らないので泊れず、裏側の小室、これ迄にどこのD・B・でも見た事のない樣な室へ、夫れでも泊ることができたのは幸であった。

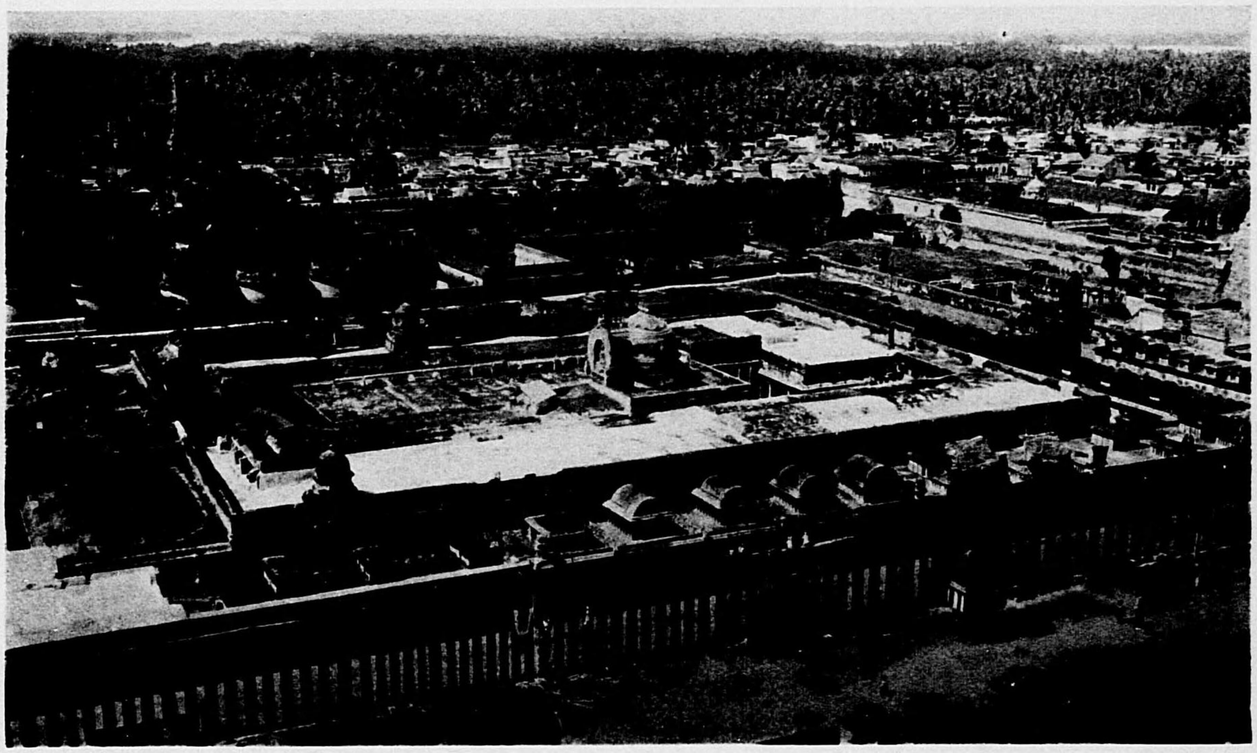
タキシが一臺入って來て、是非乘ってくれとすすめた。一日雇ひ切りで、スリ・ランガム祠へ午前と午後と二度、夫からジャムブケスワー祠へ一度行く、といって價をきいたら六・五ルーピーくれといった。從僕に六ルーピーで談判させたところ、五ルーピーに負けさせたといふ。當時一ルーピーは邦貨一圓參拾錢であったから、一日の雇賃六圓五拾錢となった。自動車の安いところもあればあるものだと感心をした。

* * * *

トリチノポリ市に、上に一殿堂の建てる大岩がある。此大岩は市中に特立してゐるので、非常に目標になってゐる。其西麓に美しい池(テッパ・クラム(Teppa Kulam)、228頁圖及び229頁參照)がある。岩には登らず、從って岩上の祠には參詣しなかったが、市内の一名所たるを失はない。而もここの祠堂は一六六〇年(萬治三年)から一六七〇年(寛文十年)にかけて建築されたといふから、たとひ後の修理が相當に入ってゐるとしても、可なりなものに違ひない。圖は此大岩の西方三哩、スリ・ランガムの町にある同名の印度敎祠堂の高い門塔(Gopram)の一の頂上から、此大岩を遠望した處。

一五九





一六〇。 トリチノポリ市郊外スリ・ランガム堂一部俯瞰。（昭和十年十二月二十八日）

「トリチノポリー」といふ名は、長くて面倒なのかどうか知らないが、日本でも横濱を「濱」といったり、宇都宮を「宮」といったりする樣に(?)、「トリチー」だの「チチー」だのといったりする時もある樣である。其「トリチー」市中の大岩の西二哩、コーベリ(Cauvery)河が叉狀をなして島をつくってゐる其嶋に、「スリ・ランガム」一名『セリンガム」(Sri Rangam, Seringam)の町がある。さうして此町のうちに、「スリ・ランガム」の大堂がある。とても規模の大きなもので、外廓は二八八〇尺に二四七五尺あって商店街を含んでゐるさうで、ファーガッソンの建築史所載の平面圖で測ってみても、南から北のゴプラム迄約一二〇〇尺(三町二十間)、東ゴプラム(最大のもので「ベライ・ゴプラム」(Vellai Gopuram)といふ、この外方にまだ二つこれより小さいのがある)から西壁迄約八六〇尺(二町十五間)ある。此平面圖には南北に八、東西に一ゴプラムが描いてあるが、實物は夫夫十一と五とある。何だか餘り大きくて、或は後に然るべく門塔を增建し、數も增したのかとも思はれるが、十分に調べたのではなし、一通りの見物では其邊がはっきりとしない。

* * * * *

トリチノポリーの方からスリ・ランガムの町に入り、此祠堂に近づいて行くと、先づ第一に左程大きくないゴプラムが、町の眞ん中に頑張ってゐる。其ゴプラムを入って尙ほ前進を續け、それとよく似たもの二つと、マンダパム(Mandapam, 吹放しの建築)とを通り拔けると、第四の門塔の前にでる。ここから內は一歩も入る事は勿論、のぞいて見る事も許されない。此門塔前を右(東)へ、塀に沿ひて左(北)折すると相當に大きなマンダパムがある。其東北方に極く近く一大門塔がある。つまり東から第三のもので其名はベライ・ゴプラム、高さ約一四六尺五寸といふ。

ベライ・ゴプラムは內部に階段があるから、頂上の階迄あがり、祠堂全體を俯瞰する事ができる。私はこの上から四枚續きに東から西へ寫眞にとって來た。外部から內部に進むに從ひ、漸く規模が小さくなってゐるので、折角この樣に大きな祠堂を建てながら、惜しい事であるといふ評はあるが、とにかく高所からの俯瞰は美しい。圖の中央に見える圓蓋は本殿の屋根で金色燦爛、一目に夫と判る。境壁に白色と代赭色と交互に塗ったのが、幔幕を張った樣に見えてゐる。

一六一。マヅラ大堂ゴプラム。

一六二。同　　境内千柱堂西面。

マヅラ(Madura Jn.)亦南印大都の一である。中印度マツラ(Mathura, Muttra. 秣菟羅)や錫蘭嶋南端のマタラ(Matara)と誤らぬ様にすべく、更にまたジャワ東端のマヅラ(Madura)と混同しない様にしなければならない。前回に行った時は驛の待合室は問題にせず、初めから公立宿舍にしたが、可なり滿足する事ができた。併し次回の時は從僕が驛は改築され、樓上の室は居心地もよく美しいから、是非とまって見る様にすすめ、下車するなり苦力を呼んで荷物を驛の階上に運ばした。いい月がでてはゐたが夜であったし、歩くのも面倒なので取敢えず樓上へ行ってみたら、夫は從僕の言ふ通り設備は申分がなく、田舍のホテル等とは比較にならない位であった。

*　　*　　*　　*　　*　　*

南印特有の代表的ドラビダ建築を有する印度教の祠堂は、少なくとも其尨大なる外郭の四方に高い門がある。其大體の形は**一五六**に見られるし、又**一六〇**左上に二つばかり小さいながら寫ってゐる。つまり長方形の平面を有する高層建築で、各階軸部は柱形や彫刻を以て充し、最上の屋蓋は左右に大棟が通り、頗る特徴のある形をしてゐる。これをゴプラム(Gopuram)と呼んでゐる事は既に屢記した通りであるが、マヅラの大堂には特に偉大なるゴプラムが、外郭の東西南北に一基づつ建ってゐる。大堂は驛の東方僅に約七八町を距つ。

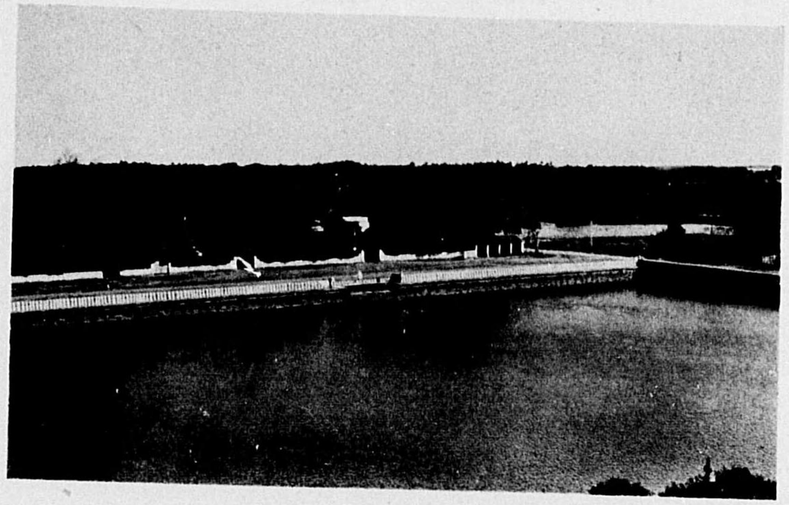
一六一は此殿堂の四大門の一である。其外郭は東西八四七尺南北七二九尺の長方形で、祠堂の大部分はチルマライ・ナイヤク(Tirumalai Nayyak)一六二三年(元和九年)—一六五九年(萬治二年))の建立にかかる。或は一に其兄ムッツ・ビラッパ(Muttu Virappa)ともいふ。其境内西北隅にサンダレスハラ(Sundaresvara)神としてシバを祀り、西南隅にミナクシ(Minákshi)神として其妻パルワチを祀ってある。其前に美しき沐浴池がある。又境内東北隅に千柱堂がある。**一六二**は其西側面を南方より見たところ。千柱堂は南印の印度教祠には、殆んどどこのにでもあるが、ここのは立派さに於いても第一流といはれてゐる。

（大正十二年一月十九日）
（大正十二年一月十九日）

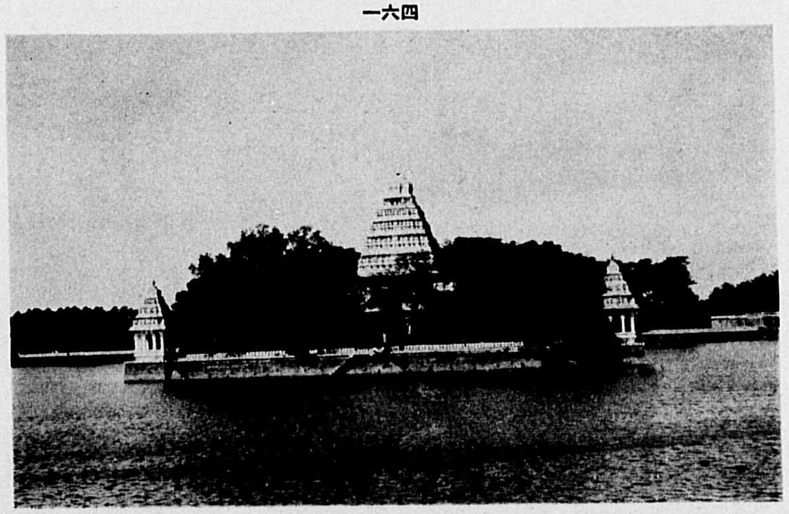
一六一

一六二

一六三



一六四



一六三。 マヅラ市郊外テッパ・クラム其一。

（昭和十一年一月八日）

テッパ・クラム（Teppa Kulum）といふのは周圍に石階のある池で、其池の中央に嶋があり、嶋には祀堂のあるのが普通で、主として南印地方に限られてゐる。此は神聖なる池で、字義は筏池といふ事ださうな。つまり毎年大堂から神體を筏に乗せて運ぶからだといふ。方一千尺ださうで、周りに花崗岩の柵があり、所所石階を設けて水邊に下りられる樣にしてある。沐浴にも用ふると見え、水浴をしてゐるものもあった。石階の蹴上等に美術的の彫刻をしたのも用ひてある。

一六四。 マヅラ市郊外テッパ・クラム其二。

（昭和十一年一月八日）

前圖に掲げた神聖池の中央の嶋と、其嶋の上に建ててある建築。中央と大きな方形の建築が一棟と、四隅に小さいのが一棟づつとあるが、下層は何れも柱間は吹放しにしてある。中央のものは階段により最上層迄上り得るが、上ってみたところで何もない。**一六三**は此最上層からとった寫眞である。池のあるところはマヅラ市の郊外であたりは廣く頗る閑靜、水は美しく、堂は白く樹は綠だから、景色としては申分ないが、建築は感心できない。

右、**一六五**。チンネベリ大堂ゴプラム脇石燈籠。（昭和十年十二月三十日）

左、**一六六**。同　　内千柱堂内部。（昭和十年十二月三十日）

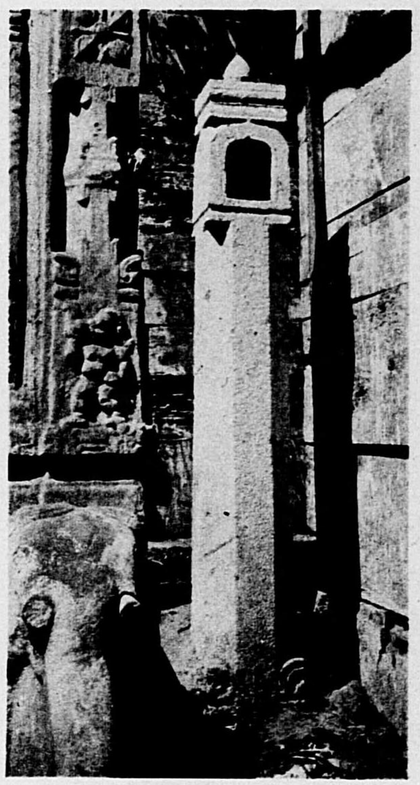
チンネベリ（Tiunevelly）の町には宿屋がないので、公立宿舎へ行かなければならない。私は朝早くトリチノポリ驛から汽車で南下し、マニヤチ（Maniyachi Jn.）驛で乘り換へ、夕刻十七時七分に着いた。マニヤチで乘換てからの汽車は、どうも腰掛けの工合がわるく、客車も粗末である。驛名ではGANGAIKONDANといふのが氣になった。マヅラとマニヤチ間でもTIRUPARANKUNDRAM, VEPPIRAIPATTI, NALATTINPUTTUR等、とても振るった名があり、少し舌の長いものや短いものにはうまく言へまい。停車場で切符を買ふときどうするつもりか。併し南印にはもっと長くてもっと變挺な名がいくらでもある。

*　*　*　*

チンネベリの大堂は間口七五六尺奥行五八〇尺、其間口の七五六尺を二等分し、各三七八尺づつとし、祠堂を二つ竝べてある。一はシバ、他は其配偶のパルバチを祀ってある。ゴプラムは兩堂に三基づつと、其間の壁に一基、合せて七基ある。其往來に面した門塔を入ると、正面にマンダパム、右方にテッパ・クラム（**一六七**）、左方に千柱堂がある。其千柱堂は——長方形だから、どちらを間口と考へてもいいが、今長い方を間口にしておくとすると——間口に一〇七本奥行に一〇本の柱が立ってるから、つまり一〇七〇本になるはずだが、中央に小堂があり、そこだけ二七本柱がないから、夫を引くと一〇四三本となり、其名よりは四三本多いので、それはとても大變な數である。其内部の極く一部を**一六六**に出しておいた。

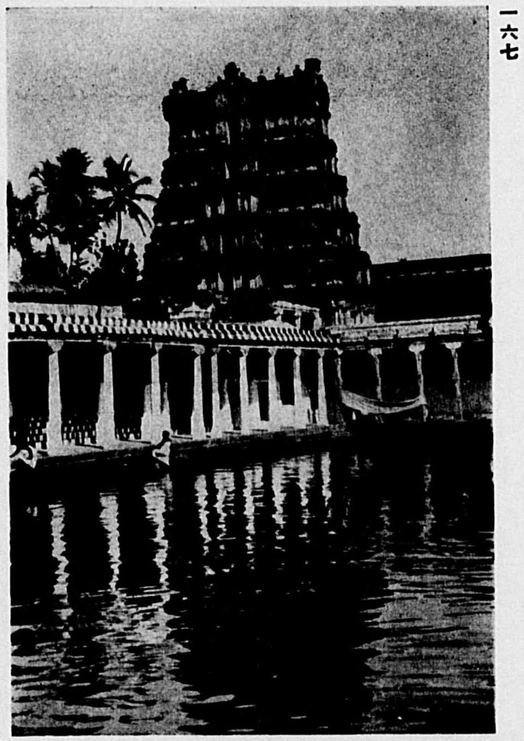
一六五は往來から入らうとするところの傍にある石燈籠。實は隣りの家で、此前に商品を堆く積み、竿の下の方がまるで隠れてるて何うなってるのか判らないので、此家の主人に話してどけて貰ったら、ほんの僅かの飾りが下につけてあっただけで、別に基礎といふ様なものはなかった。基礎も中臺もなぐ、笠は發育不完全で、甚だ物足りない。これが一基見當ったので、これで回教と印度教の石燈の實例ができた。此を元として基礎・中臺・笠を考へれば、印度教の石燈の面白いのができると思ふ。

一六五

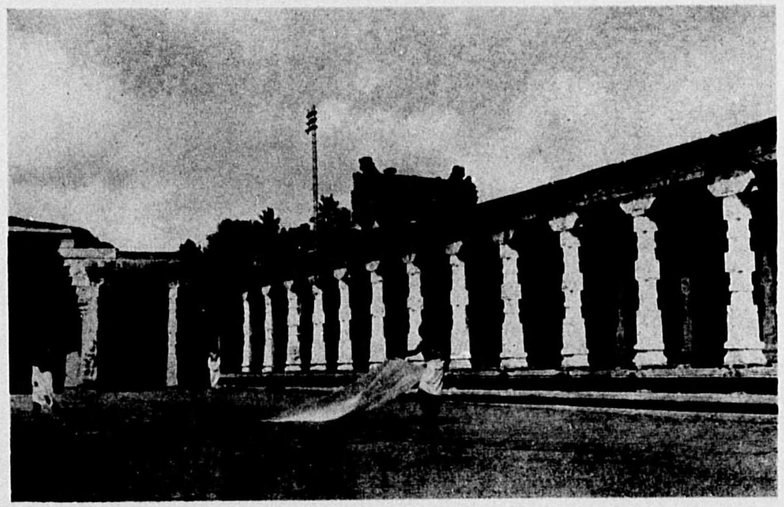


一六六

一六七



一六八



上、**一六七**。チンネベリ大堂内テッパ・クラム。

下、**一六八**。同　　マンダパム一部。

（昭和十年十二月三十日）

（昭和十年十二月三十日）

此祠堂内も、やはり履物をぬぎ、跣足でなければ入れない。ここは忠竹林（Tuticolin）から態態當有な印度人バイサンジ・ゴルダンダス氏が番頭を連れて出て來て、番頭をつけてくれたので、どうもこちらも大護歩し、靴をぬいで靴下だけで入った。さうしたら番頭が當局と打合しておいたといふので、祭禮の時に用ふる祭器寶物の類を見せてくれた。馬・ガネサの乘る大鼠・眼鏡蛇・白澤等、いろいろなものがあった。よく見せて貰った事だと思った。千柱堂は錠が下ろしてあったのを、あけて内部へ入れてくれた。地方の有力者の斡旋によらなければ、到底見物は思ひもよらない。

一六七は大堂内にあるテッパ・クラムの一部。中央の小亭は見えないが、周圍の回廊の柱と、ゴプラムの一つが水に投影し、風致は中中よろしい。十二月三十日ではあるが、コモリン角を距る僅か五十哩そこそこの所では、朝早くて八月末か九月初位の氣候、日中では可なりあついから、水は特に氣持がよろしい。**一六八**は廻廊とマンダパムの一部。テッパ・クラムで沐浴して、きもの——といっても一枚のきれだが——を中庭で乾かしてあるところ。

祠堂の周囲を一巡したが、西北を正面にして海岸に建ち、申分のない形勝の位置を占めてゐた。ゴプラムがトリヤチノポリやチンチェリ、クンバコナムのヴィラの様に人家稠密、色の黒い跣足の人間の右往左往してゐる所にあるのも、沟によく似合つてゐるが、又この様に椰子樹の間から頭だけだしてゐるのも、亦南印の典型的風景の一つである。歸りはゆつくり車を走らせたので二時間と三十六分かかつた。

たのは十五時五分、つまり一時間と三十五分、五制限になつて了つた。

十三時半出發といふ時刻は正確に守られ、番頭が車をもつて來てくれた。中中一時間ではつかず、祠堂の大コプラムの修に修たのは十五時五分、つまり一時間と三十五分、五制限になつて了つた。

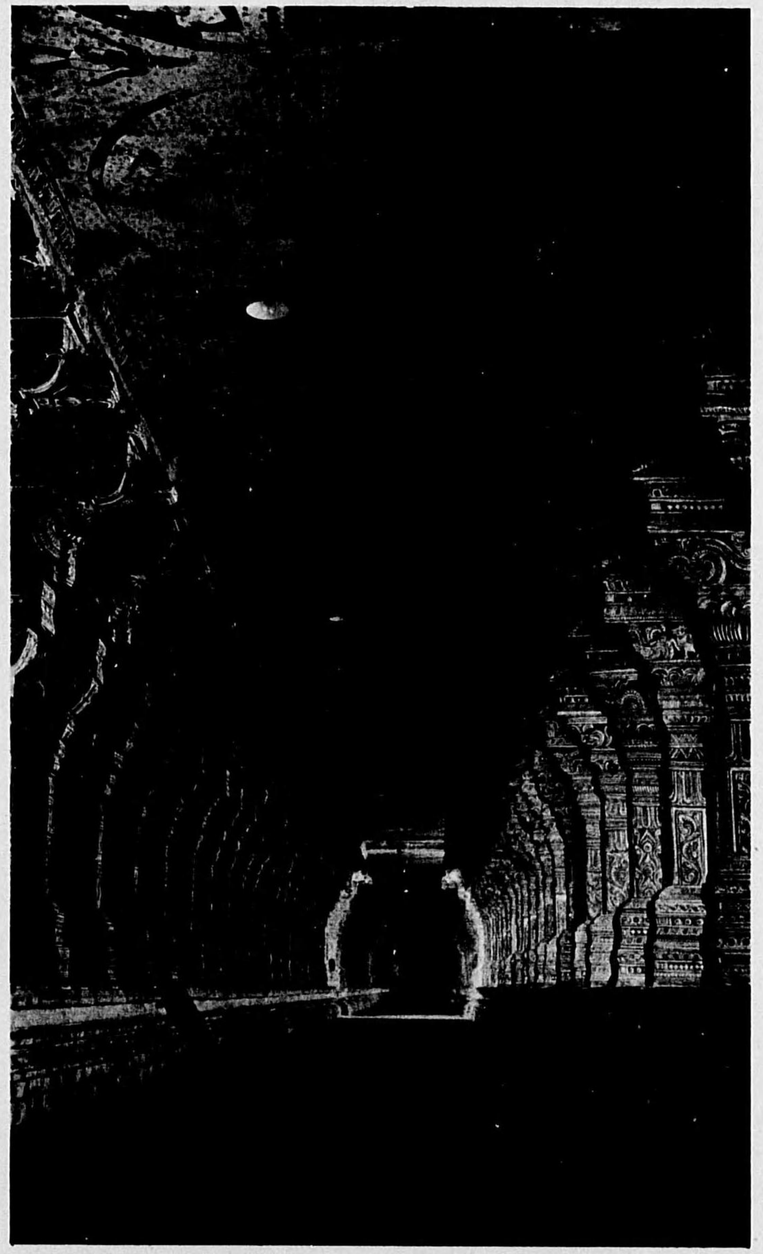
祠堂の周囲を一巡したが、西北を正面にして海岸に建ち、申分のない形勝の位置を占めてゐた。ゴプラムがトリヤチノポリやチンチェリ、クンバコナムのヴィラの様に人家稠密、色の黒い跣足の人間の右往左往してゐる所にあるのも、沟によく似合つてゐるが、又この様に椰子樹の間から頭だけだしてゐるのも、亦南印の典型的風景の一つである。歸りはゆつくり車を走らせたので二時間と三十六分かかつた。

一六九。 チルチンノーポルのスプラマニヤ堂遺跡。

チルチンノーポルの大堂の見物は、事實は人の一面りの見物程度である。又こうしておかねばならぬ事情もあつたので、午前中でさんざんだから、十二月三十日の午後を如何にすべきやといふが問題になつた。一つはコモリン角へ往復するので、こゝは少し時間が不足だから、歸りは夜になつてもいゝとして、こゝにかゝ印度の南端へ行つたといふだけで、大に自慢でしてやらうといふ腹である。一つは印度教祠堂を見に行くので、幾つ見ても似たりよつたりだが、見て損する筈はない。そこで十分考へてみたが、世竹林の少し南にチャチェンゾールといふ所がありゝ、そこにスプラマニヤ神（シヴァ）の大堂があるのを見に行く事にした。チンチェリから三十八哩一時間位で行けるとあつた。

十三時半出發といふ時刻は正確に守られ、番頭が車をもつて來てくれた。中中一時間ではつかず、祠堂の大コプラムの修に修たのは十五時五分、つまり一時間と三十五分、五制限になつて了つた。

一七〇



一七〇。 ラメスワラム大堂廻廊内部。

錫蘭嶋のタライ・マンナ棧橋から連絡船でダヌシュコヂ棧橋へ着き、汽車へのり込んでから、車窓の右手前方遙かに一大ゴプラムが、朝日を一ぱいに受けて光り輝いてゐるのがよく見えた。言ふ迄もなくラメスワラム大堂の夫の一。此際何とかして一瞥でもしておかないと、最早永久に望みはない。是非たとひ十分間でもいいと決心をした。決心だけは出來たが、時間の關係が中中うまく行かない。今「インド・ー・シーロン・エキスプレス」といふのでダヌシュコヂ棧橋を十時十分にたつとして、ラメスワラムへ行くためには、パムバン(Pamban Jn.)驛で下車して、ことラメスワラム驛間、僅か二十七分汽車へのるため、一時間と三十二分待たねば出ない。牛車も自動車も得られないし、たとひ得られても途もよくないから、時間は餘計にかかる。結局汽車より仕方がない。夕食や其他の關係で、マヅラ驛へ十九時三十八分に着かないと困るから、どう始末してもラメスワラム驛へ下車してから、更に乘ってパムバン驛に引返し、同驛發十四時二十七分の汽車へのらなければならない。さうすると僅かに五十三分しかない。この五十三分間に大堂の見學を終らねばならぬのであった。當時の汽車時刻表はこうであった。恐らく今でも似たもので、今後もさうだらう。パムバンにもラメスワラムにも公立宿舍はないのだから、手薄な設備で旅行するものには、ラメスワラムの見學はまことに一苦勞である。

* * * * * * * * *

ラメスワラム(Rameswaram)大堂は驛から隨分遠い。はっきり記憶はないが、馬車で急いで片道十分はかかった。結局總てを三十分間でまさなければならない。所で汽車から見えたゴプラムは東ので、西のは小さくて町の中にある。この西ゴプラムの前で馬車を降り、廻廊の北側を一巡して裏へ出て、東ゴプラムを近くで見て、更に南側の廻廊を通つて、元の西ゴプラムへ出たのである。幸に廻廊内は靴のまま歩いても差支ないといふ事で大分に好都合であった。此殿堂では何といっても廻廊が見もので、長さ併せて約四〇〇〇尺(即約十二町弱)幅さ一七尺——二一尺、高さ約三〇尺、柱長一二尺、基壇五尺といふ。此大堂は奥行約一〇〇〇尺幅さ約六五七尺の長方形の敷地内に建ち、古い部分は第十五世紀頃となってゐるが、大體は第十七世紀とされてゐる。

(昭和十一年一月七日)

一七一。錫蘭嶋アナラジャプラの無畏山塔遠望　其一。

（大正十二年一月二十六日）

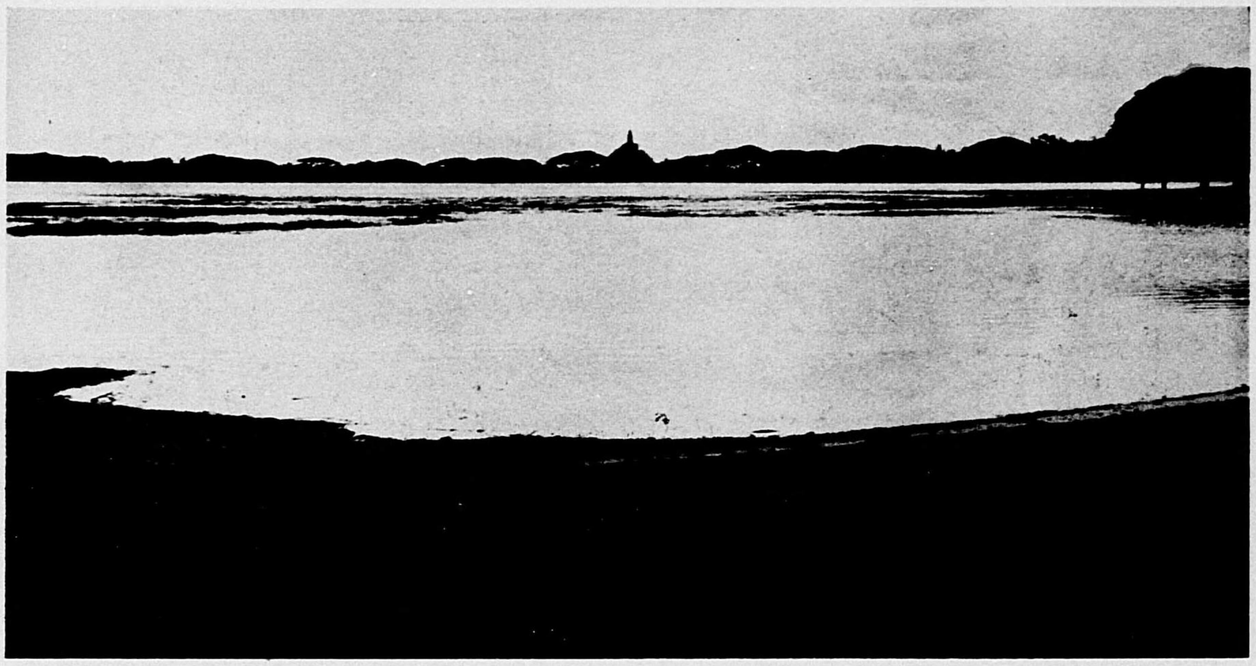
錫蘭嶋には、我我の見學すべき所は多多あるが、何といっても「アナラジャプラ」と「ポロンナルワ」とは、是非行かなければなるまい。さうして急ぐなら半日でも一通りはすむ。一例を擧げれば第一日朝古倫坦發、ひる頃アナラジャプラ着、午後見物一泊、翌第二日午前ミヒンターレ遺址見物、午後車でポロンナルワ着、一泊、第三日遺址見物、夜ポロンナルワ驛より乘車、第四日早朝古倫坦歸着。これでは素通りも同じで、何にもなるまいが、見ないよりはよろしい。それに印度內地旅行の樣に、從者も食料品も寢具も持たず、單獨で小さい鞄でも一つ下げれば充分。東海道を旅行する樣なもので、何でもないから誰でも出かけられる。歸ってくれば人竝に法螺も吹けるから、決して損をする事はない。カンデーなんかはどうでもいいから、この方へは是非行く事を讀者諸君に勸告するものである。

*　*　*　*

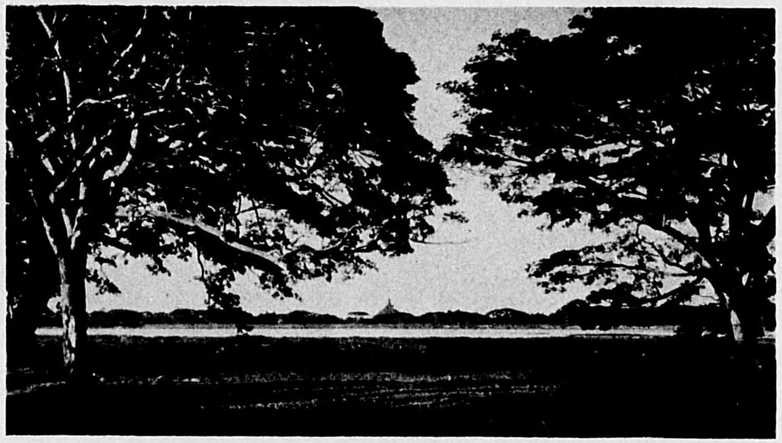
アナラジャプラはAnuradhapuraと綴ってある。字の通りに讀めば「アヌラダプラ」である。併しさうではなくてArnarajahpuraと發音するのだと書物に記してある。さうすると假名だと「アーナラジャープラ」とかくべきだが、面倒だから長音符をやめておいたが、ここには古塔が多く殘ってゐる。そのうち最大なのがこの「無畏山塔」で【法顯傳】に

其國和適ニシテ冬夏ノ異ナク、草木ハ常ニ茂リ、田種ハ人ニ隨ヒ時節アルナシ。佛其國ニ至リ惡龍ヲ化セント欲シ、神足ノ力ヲ以テ一足ハ王城ノ北ヲ蹈ミ、一足ハ山頂ヲ蹈ム。兩跡相去ルコト十五由延ナリ。王ハ城北ノ跡上ニ於イテ大塔ヲ起セリ、高サ四十丈、金銀ニテ莊校シ、衆寶ニテ合成セリ。塔ノ邊ニ復タ一ノ僧伽藍ヲ起シ、無畏山ト名ヅク、五千ノ僧アリ。云云。

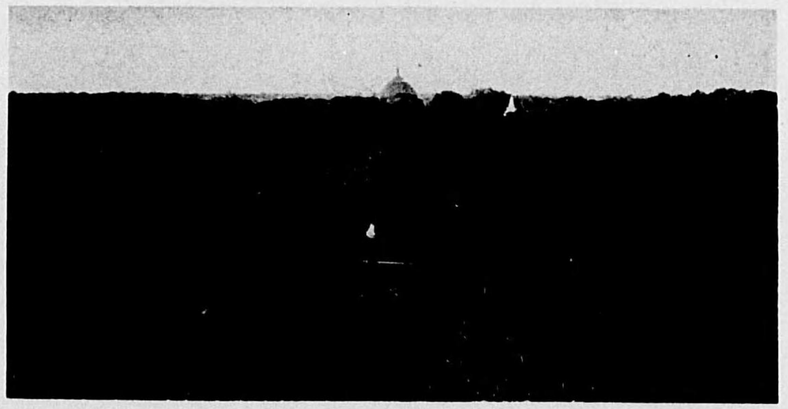
とある、其無畏山塔をバサワク池(Basavak Kulam)をへだてて遠望したもの。今から二十年前の寫眞だが、此景が非常に氣に入ってゐるのである。



一七二



一七三



上、一七二。錫蘭嶋アナラジャプラの無畏山塔遠望　共二。

（昭和十一年一月二日）

下、一七三。同　共三。

（大正十二年一月二十七日）

一七二は前圖同樣バサワク池畔から遠望したもの。池畔には違ひないが、少し離れて樹木の間から見たところだが、又別種の趣がある。錫蘭嶋第一の高塔だから、さうして由緒のある塔だから、いろいろの角度から見る必要がある。

一七三は今となっては到底とる事のできない寫眞。即同所にあるルアンウェリ(Ruanweli)塔が丁度二十年前から修理中であり、下半分だけは煉瓦を卷き、上は森林の樣な狀態であり、煉瓦を卷いた上迄は勝手に登れたので、そこから寫したもの。其右方樹間に白いのはツバーラマ塔の一部。

一七四。錫蘭嶋アナラジャプラの無畏山塔全景。

（大正十二年一月二十六日）

書物に記してある寸尺左表の通り

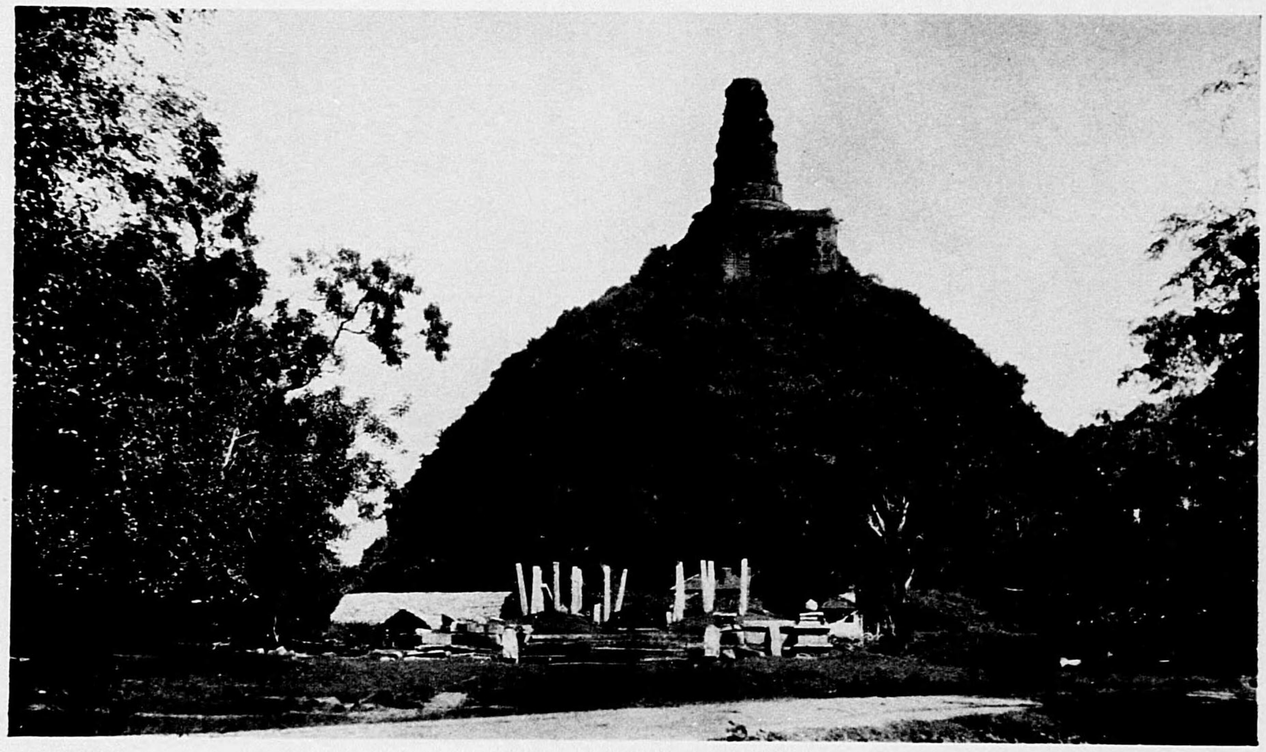
現高	伏鉢徑	原高	創建年代
二九四尺（相輪共）	三一〇尺	四五〇尺	西紀前八八年

曩に【法顯傳】の一部を引用した通り無畏山塔はこれに違ひないのだが、これがジェタワナラマ塔と間違ってしまったため、今更元へ戻すと却て混雜するから、其ままにしておくと大概の書物には斷ってある。私もつい此頃迄夫に從ってゐたが、昭和十一年一月に行った時は、立札はやはりこれを無畏山塔にしてあったから、本家本元でもその誤を正したものと見える。無畏山は Abhayagiri といひ、「阿跋耶祇釐」・「阿婆耆梨」等の字をあてゝある。

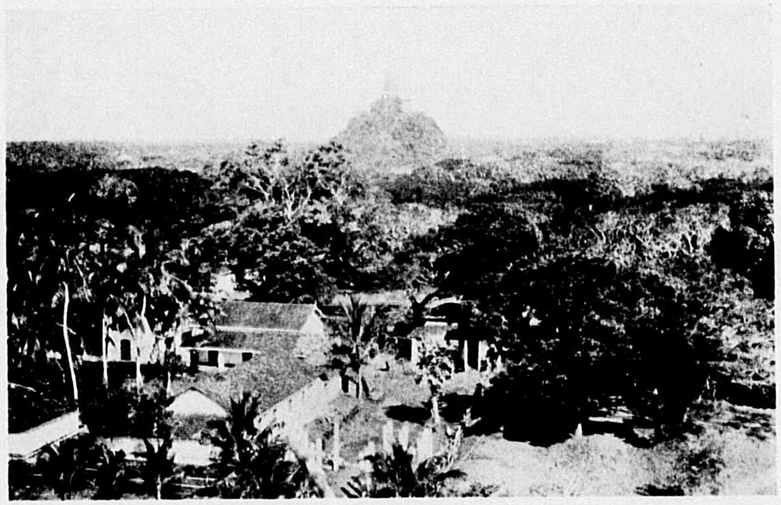
案内書には西紀後第四世紀の建立としたのがあるが、前表によると、そこに大分の差があり、何れが正しいか遽に判じかねる。前八八年だと、我國では崇神天皇十年に當る。

此塔の基部には蓮花瓣の裝飾がある。其各瓣の形も可なり古式で、且つ瓣間にはパールハット塔婆玉垣其他に見る如き純粹の埃及式蓮花文が現はれ、とにかくここでは最大で大漏斗を地上に伏せた樣な形で、近くでみても申分のない完好な形態をしてゐる。

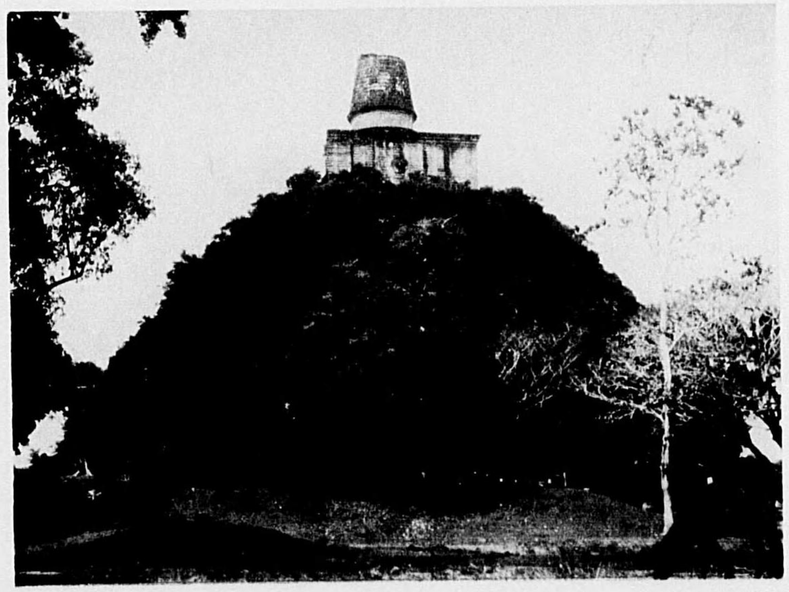
一七四



一七五



一七六



上、**一七五**。錫蘭嶋アナラジャプラの祇園塔遠望。（大正十二年一月二十七日）

下、**一七六**。同　全景。（大正十二年一月二十六日）

現高	伏鉢徑	原高	創建年代
二三〇尺（相輪を除く、明治二十四年復原）	三二五尺	二七〇尺	西紀後二七五年—二九二年 一説西紀前一世紀

其寸尺は右表の通り。此塔實はジェタワナラマ(Jetawanarama)塔であるが、これがアバヤギリ即無畏山塔と名が入れ替ったのである。ジェタとは祇多とかき祇園と譯してゐるのは、ジェタバナ・ビハラ(Jetavana Vihara)を祇園精舍と譯してゐるのでも判るであらう。**一七五**はルアンウェリ塔上からの寫眞で、昭和十一年には殆ど全體煉瓦を卷いて了ったし、足代も未だ架けてあったから、住職にでも話をして登ればとにかく、さうでなければ到底再びとる事はむづかしい。**一七六**は近景で元通り。アナラジャ市第二位の大塔。

一七七。 錫蘭嶋アナラジャプラの廢佛齒寺一部。　（大正十二年一月二十六日）

佛齒寺（Dalada Maligawa）といふのは佛の齒をまつった寺のことで、「佛」とは「釋迦牟尼佛」の事である。アナラジャプラとカンデー（Kandy）とにある。カンデーの方は今でも寺運頗る隆盛で、大きな池畔にあるので景色もよろしいものだから、日本から佛蹟巡禮に出かける僧侶は勿論、歐羅巴へ行くあらゆる日本人は皆行く樣だが、こちらのは反對に殆んど誰も行かない。時間の關係が勿論大にあるので、大概は行き度くても行けない、從て初めから問題にしない、其結果はそんなものがあるのかといった有樣なのは無理もないのである。

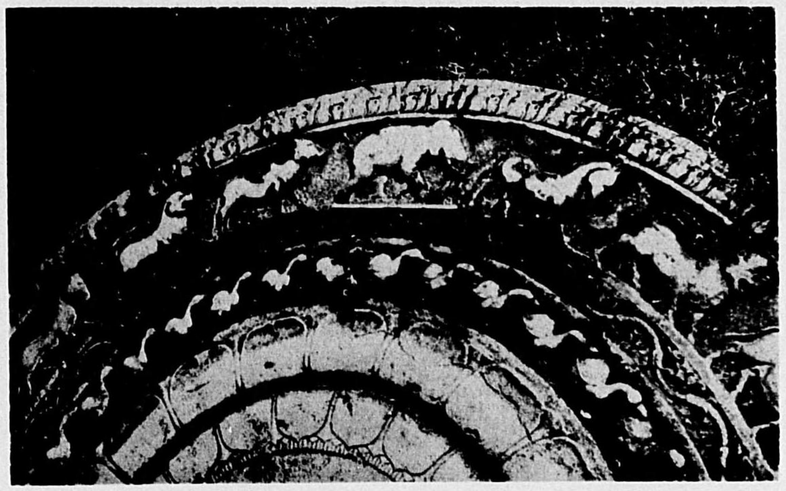
一般の人人には、遊覽地としてカンデーの方が設備も整ってゐるし、面白いだらうが、遺跡としても又建築的價値からいってもこちらの方が遙に上である。ここの佛齒寺は大分によく殘ってゐる。基壇・半圓石（**一七八**）・正面の石階・耳石・留石・內外陣境の出入口の枠等がはっきり判る。耳石上端に沿へる笠石はマカラ（Makara. 摩竭魚・摩迦羅）の口から出てゐるところ及び留石の側面に片蓋柱があり、其柱頭の上に象が一疋蹲ってゐるのも見える。

特に興味のあるのは內陣柱の若干である。圖は內陣の一部を側面から寫したもので、寫眞には六本見えてゐるが、特殊な柱頭をもってゐる柱を指すのである。此は何に象ったものかはっきり判らない。とにかく其當時は佛齒を祀ってあったが、タミール族の侵入の際、所所に移され、一度は印度に持て行ったが、後幸に取戻し得たので、現在はカンデーの佛齒寺に安置してあるのださうである。其佛齒なるものは少し彎曲した野猪の子の牙の樣なもので、到底人類の齒とは考へられぬもの。夫である書物には此特殊形式の柱を指して「佛齒に象ったものと想像されてゐる樣な奇なる形をしてゐる」といふ樣な事が書いてある。【錫蘭の亡都】の著者ミットンは「不思議な形をした柱頭は、屢佛齒に象ったと言はれてゐるが、此際適切とは思へない。どうも他の建物の柱頭に比べてみても、負けない位優美でもない。ただ「奇妙」といふ評のみが最も適當な言葉である」といってゐる。

佛齒に象ったといふのは、いくらほとけさんに猪牙の樣な齒が生へてゐたとしても言語同斷だが、「奇妙」といふより他に評のしようがないも考へが足りない。嘗て私は金剛杵（三鈷か五鈷）に象ったものかも知れないと書いた事があったが、此後シバの持ってゐる三叉戟かも知れないといふ說が其後に出た。

一七七

一七八



一七九

上、**一七八**。錫蘭嶋アナラジャプラ廢佛齒寺前半圓石部分。

下、**一七九**。同　　北方佛殿前半圓石部分。

（物差は曲尺の約一尺（一呎）・昭和十一年一月一日）

錫蘭嶋の遺跡では、アナラジャプラでもポロンナルワでも、佛殿・僧坊等の正面石階の下に、丁度半圓形をした石で、其上端に美しい薄肉彫をした石が置いてある。土地では何といってゐるか知らないが、英語ではムーン・ストーン（Moon Stone）といふ。辭書を引いてみると、ムーン・ストーンには「月長石」といふ譯がついてゐるだけ。鎭石の名だからこれでは間に合はない。半圓形をしてゐるのだから「半圓石」でよからう。英語でならハーフ・ムーン・ストーンとするかセミサーキュラー・ストーンとしておけばよく判るのに、紛はしい名をつけたものである。

今此所に私は僅に二例を示しておく。**一七八**は廢佛齒寺前ので、殆ど全部が見えて居るが、**一七九**のはほんの一部分で、この方は優美な唐草も勿論だが、實は水鳥の行列――蓮を銜へてゐるのに注意せよ――を見せるのが主なので、他の方は犧牲にして了ったのである。まだこの遺跡にも多くの實例があるし、ポロンナルワにもあるが、大同小異であるから容易に類推ができる。白大理石の面にこの樣な薄肉の彫刻をしたのに、それがどうしてこの樣に後世迄、はっきり磨滅せずに殘ったかといふに、土地の人人は殆ど總て跣足で歩くから、いくら踏みつけても、相手がたとひ極端に肥厚してゐたところで、足の裏だから更にこたへない。だからすりへらずと殘ったと見られる。この見方は確かに間違はあるまい。併し夫にしてもほんとうにはっきりとよく殘ったものである。

中心は大きな便化蓮花で、よく發達した子房の周圍に雄蘂があり、其外側に二列に複辨蓮花を刻し、其外側には「水鳥の行列」がある。上圖のは何も銜へてゐないが、下圖のは蓮の蕾・花（埃及式）・葉とを銜へてゐる。銜へてゐないで、互に向ひあってゐるのなら、一例だが**一八九**にもある。羽をひろげて樹葉の樣なものを銜へた行列なら、アマラバチの廢塔殘闕にもある。かく數へてゐてはきりがない。此水鳥は支那にその儘入り込んでゐるし、日本へも渡來してゐる。奈良時代の「花喰鳥」といふのが夫である。其外側の獸類の行列、獅子・馬・象・牛は、馬と獅子と順序が入れ替ったのなら、鹿野苑出土の阿育王柱頭側面にもある（**一二五**）。一頁の解說では盡せぬからもうやめるが、洵に面白いものである。

二八。錦繡峠ミヒンタヤーの休坪。

（昭和十年一月二日）

アラジャ市ミヒンタヤーハ（Mihintale）間八哩ヒラフ。道は非常によろしい。

以前から馬車も自動車も通ってゐたが、前回は沿道の景色を眺めるのと、費用を節約するために馬車にしたけれども、今回は自動車を奮発に及んだら、宿を出てから僅かに三十分で山の下迄行く事が出来た。馬車に比べると時間は三分の一。

今のこは場所も異なってゐるかも知れないが、西紀前十九年といふから、さきの二〇〇〇年前、メヂカヤ（Bhatikabhaya）王の勅命により、ここにアナラジャ市との間に、全部毛氈を敷詰めたので、巡礼は土をよりも非なしに八哩が歩けたといふ。嘘かほんにうか、飛んでもない非が書いてある。

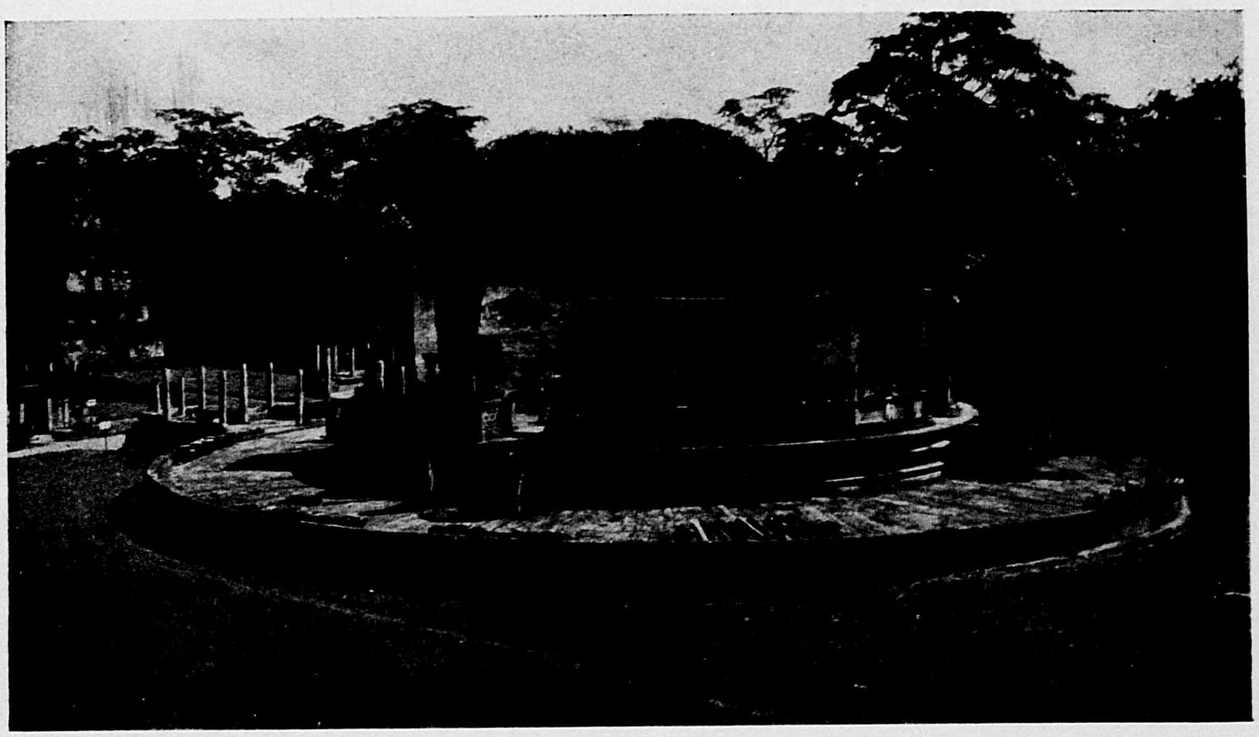
アラジャ市には立派な宿屋が一軒ある。二度此宿屋へ泊たが、費は公立宿舎に含もある。ミヒンタヤーにもあるが、だから宿屋はやめにして、両方共公立宿舎に泊れるから、この方がくりつ泊れる。

館程驚明なやり方である。

山の下から頂上迄、顕上の低い路面の底い石段が一千八百以上あるそうだが、夫が手入が行屆かず凹凸しではこうけれども、幾に上れる。井戸から半分位たたと思ふが、左方に曲るあたりにも小伽坊の廢址の一がある。圖はその寫眞で、一部分しか見えてゐないが、主の配置・中庭の有様・石筧・石水槽等がよく残ってゐる。恐らく非位置も大しで動いてはゐないと思ふ。これは全くの道傍で、態態よりみちをしないでも、歩いてゐれば見えるのだから始末にまうしい。前回とった寫眞と比べたが、まるで非後手をつけてないと見えて、そっくりそのまま。たゞ樹木のかげが石筧と石水槽との間に黒くさして大木が一本生へたせいか、繁った樹木のかげが石筧と石水槽とのみ、川に近かければ都合ろうだけであった。

印度各所の石窟院の伽坊では、飲料其他の水を得るため、川に近かければ都合がいいけれども、こうでない時は岩を掘鑿して水槽にしたり、いろいろ苦心をしてゐる。併しこの様なところでは、筧をつくれば水は自然に流れ込む。取てこに限らずどこでもかういふ手段をとる。ここでは沐浴池としては立派な「龍池」（Naga Pokuna）があり、飲料水道としては石筧を用ひたのであった。

一八〇



一八一。錫蘭嶋ポロンナルワのワタ・ダーゲと六重塔 其一。（昭和十一年一月四日）

錫蘭嶋の東海岸なるバチカロア（Batticaloa）と古倫母間は、毎日午前午後夫夫一回づつ雙方からポロンナルワ驛を通って汽車が通ってゐる。ここにはアナラジャプラ程塔はないが、遺址は隨分面白いし、居心地のよろしい公立宿舍が大きな美しい湖畔に建ってゐるし、將來機會があったら、是非一遊を讀者諸君に勸告する。

ポロンナルワ（Polonnaruwa）の遺址は、驛から三哩距ってゐる。今は知らないが、以前は可なり途がよくなかった。だから相當の時間がかかるものと思はなければならない。けれども公立宿舍からは近いから、見學には洵に都合がよくできてゐる。その遺跡は殆ど南北の直線上にならんでゐる。さうして殆ど全部行屆いた修理ができてゐて、南端のポットガル・ベハラ（Potgul Velaru）から北端のデマラ・マハ・セヤ（Demala-maha-seya）迄、可なりの叢林の中を一人で歩いても心配はない所ではなく、ゆっくり樂しく歩けるが、今から百二十年ばかり前には、野獸の巣窟で、一八二八年（文政十一年）フォーブス少佐（Major Forbes）が行った時なんか、遺址の一なるシバ・デバール見學の際、案内人は手斧をもって先にたち、入口のところで内の樣子を伺ひ、自分達はいつでも發砲のできる樣に銃を用意し、案内人は内部に向って大聲をだして呼び、暫くたってから熊のゐない事を確めて、やっと入ることができたといふ樣な次第であった。

* * * * *

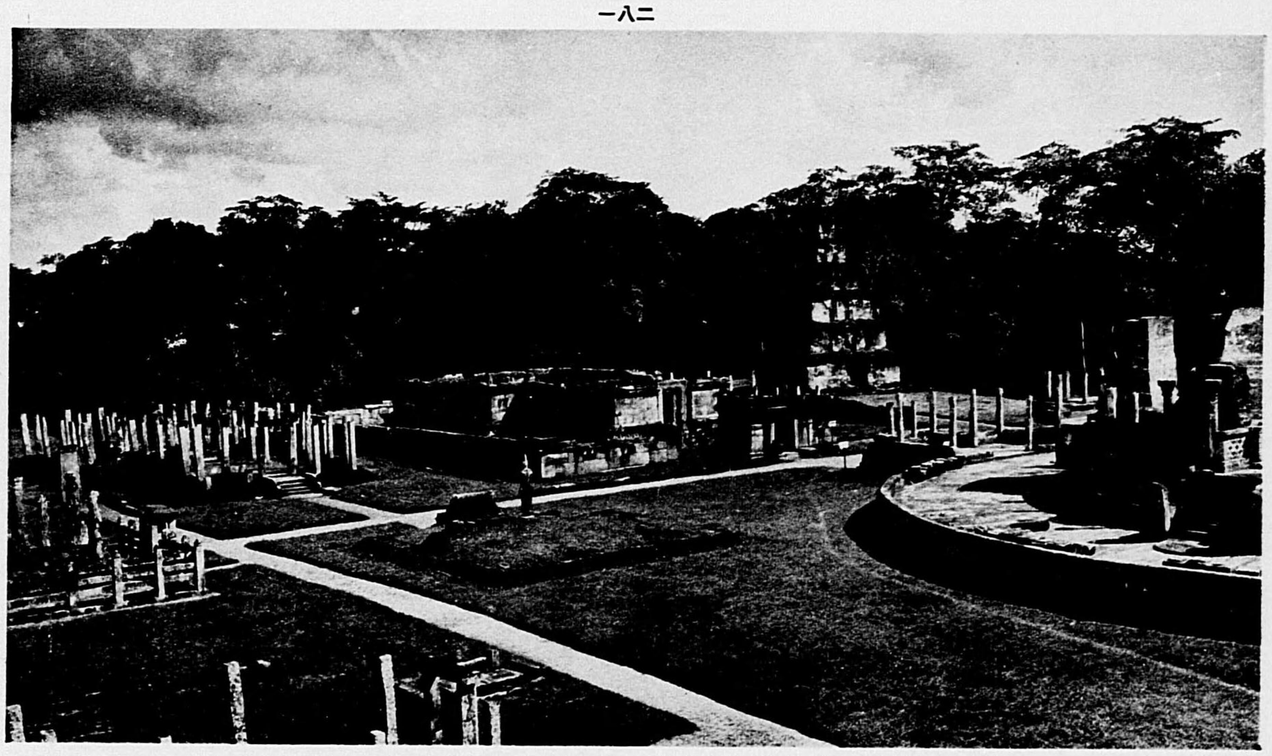
此遺址では、何といっても唯一無二の建築は「ワタ・ダーゲ」（Wata-dage）である。「ワタ・ダーゲ」とは「圓形の遺物堂」（Circular Relic-house）といふ意ださうで、これこそパラクラマ大王（Parakrama Bahu I）が一一六四年（長寛二年）、一說一一五三年（仁平三年）に建立した眞の佛齒寺であったといへよう、とミットンはいってゐる。其全形は圖の如きもので、全く圓形の平面を有し、第一の基壇は、其周圍の笠石約五尺の高さで、入口は北方に唯一つあるだけ。第二の基壇は更に第一基壇より高く、入口は四方に一所づつ合せて四つ、階段の耳石にはマカラを刻み、留石も半圓石もあるが、四方何れも意匠に多少の差があり、東側のもの最も美しい。さうして四方の石階の間の壁面には、下段と上段とは片蓋柱を以て適當に區劃し、各區劃内の羽目石からは夫夫「獅子」と「侏儒」とを厚肉に刻みだし、そのもう一つ（次頁へ）

一八二。 錫蘭嶋ポロンナルワのワタ・ダーゲと六重塔 其二。 （昭和十一年一月四日）

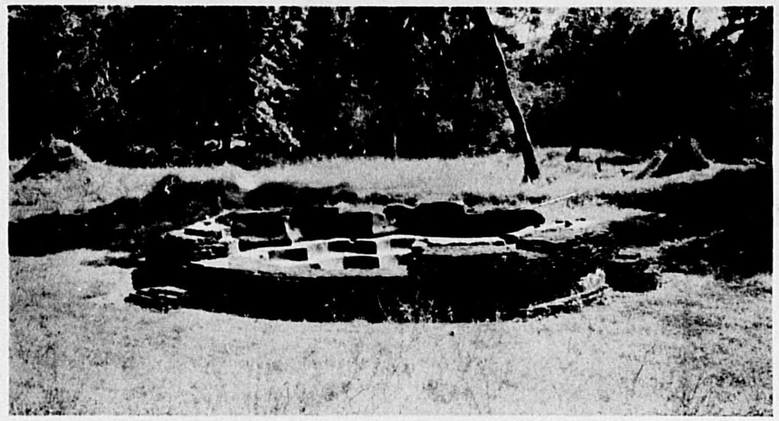
（前頁より）内側の上段には——便化蓮花かも知れないとも思ふが——四瓣花を彫刻してある事恰も花狹間の如きであるが、其中には單に陽刻しただけでなしに、間を透彫にしたのがある。此を木で造ったのだと、長野縣諏訪郡本郷村乙事の諏訪社拜殿と幣殿との間の棧唐戸の花狹間式のもの。但しあれとは比較にならない程古くて材料が石だから大したもの。この透彫をミットンは唯一の意匠だといってるから、或はこの様なのは、めったにないのかも知れない。此花狹間壁は周圍連續ではなく、恰も勾欄親柱の様に、一區劃毎に柱がたててある。全くの裝飾柱で、柱頭も大きく美しい彫刻がしてあり、下部は蓮座にたち、柱身から上は八角形である。更に此内部に第四重目の煉瓦壁あり、この最後の煉瓦壁内の中央に更に又基壇があるが、この基壇上には嘗て塔婆があったので、ミットンは現在は形は全部崩壞してるると書いてるるが、夫は彼が【錫蘭の亡都】を出版した大正六年の頃の有様で、昭和十一年にはともかくもある程度迄推定復原がしてあった。此内部塔婆の四方には、臺座の上に佛の座像が安置してある。以上がこの珍らしいワタ・ダーゲの現狀である。此以上の復原はとてもむづかしい。現在のところ迄戻すのでも容易の業ではない。全く錫蘭考古局の一方ならぬ努力の賜で、滿腔の感謝を捧げねばならぬといってるるが、全く其通り。小生も年不及以前は多少此方面に關係があったので、この點はよく理解してるる。

ワタ・ダーゲの北、即**一八二**の略中央にあるのはアタ又はハタ・ダーゲ（Ata-(Hata-)dage）といふので、内部には立派な石佛の立像がある。此は「八つの遺物の堂」といふ意ださうな。ワタ・ダーゲの東、圖では右にある六重塔は、當初は七重であったので、名はサト・マハル・プラサダ（Sat-mahal-prasada）といふ。どこの言葉か知らないが、この名は七重といふ事を現はしてるるのださうな。ミットンは「これは何のために建たのか判らない、内部は殆んどつまってるるし、外部の階段も一階でおしまひだし、先づ今では蛇の住宅であらう」といふ様な半分悪口を書いてるるが、これが支那の塔のあるものに似てるるところが大に興味を惹く。ランコット・ベハラ（**一八五**）、キリ・ベハラ（**一八六**）があると同時に、七重目の屋蓋に小さい塔婆でも乘ってるたかも知れないと想像しては不都合であらうか。

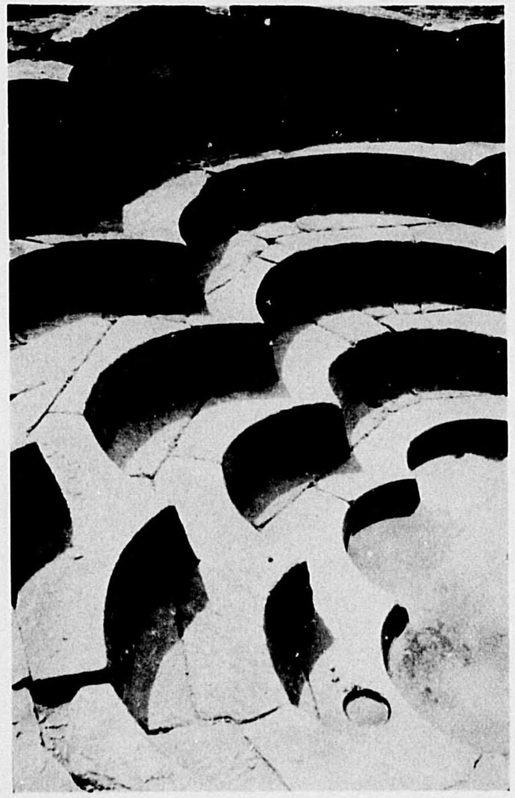
一八二



一八三



一八四



上、一八三。錫蘭嶋ポロンナルワの蓮花風呂全景。

下、一八四。同　　部分。

（昭和十一年一月三日）

（昭和十一年一月三日）

ポロンナルワ遺址のうち北方の分は、キリ・ベハラ（一八五）のある邊よりはずっと離れてゐるが、現在發掘のすんでゐる最北の分はデマラ・マハ・セヤといひ、あの塔から約十八町あるが、そこまで行く途中、ざっと十二三町位、途の左側で少し入ったところに、世にも珍らしい蓮花風呂がある。其發見の動機は、錫蘭考古局の人人が叢林で作業をしてゐた時、偶然にも彫刻を施した石があったので、夫をたよりに發掘を試みた結果、石風呂の全貌を明らかにすることができたのであった。全體は五段になり、各八瓣花より成り、中心を同じくして、一つが一つより大に、下から四段迄は恰も圓弧を八つ集めて花形にしたので、最上段のものは、側面に大きな單瓣蓮花文を薄肉に刻してある。

公立宿舍からここ迄はざっと一里ある。自動車だと五六分位なもの。私はアナラジャプラから自動車を雇ひ、叢林を伐り開いてつけた道を六十哩突破して、公立宿舍迄乘りつけ、其車で直に見物に出かけた。さうでないと車はない。今はこの樣に見學は樂だが、ミットンが行った時は大分困ったらしく、此邊は時に野象の大群が横行し、相當に危險もあったらしいし、又漸くにして辿りついたところで、大道からの分れみちは、樹枝がはね返って顏に當たり、蜘蛛の巣に引かかったり、いろいろな目にあって漸く見て、非常に滿足したらしい記事がある。夫に比べてみると、何にしろ車の内に納ってゐて、宿舍から五六分で乘りつけられるのだから、有難いことである。

私は寸法を測らなかった。實は卷尺もなくて測れなかったが、書物に記してあるのでみると、上の直徑――瓣の中心から中心迄か、或は二瓣が出合って莢を作ってゐる其所の直徑か、夫が記してないので判らないが――約二十四尺七寸、深さ約四尺五寸、さうして最も下の最も小さい八葉の蓮花の直徑約五尺三寸。下には土がつまり草が生へてゐたさうだが、私の時にはその上に水がたまってゐたので見たところは一八四の樣であった。さうして石もきまった形のを用ひず、任意の形及び大さのものをうまく集めてつくりあげてゐる。尙ほ彼は自分は蓮花とは見ないで寧ろ「チュードル王家の紋の薔薇の花」に見えるといってゐる。英國人はかういふところへ行くときっぱり判らない。

一八五。 錫蘭嶋ポロンナルワのランコット塔遠望。　（昭和十一年一月三日）

圖は北方の高地から南方を見た寫眞である。他の方向からでは、當時は何れも樹木が近くにあったので、この樣な全景はとりにくかった。私はこの景が大好きである。何もない廣場に塔が唯一基建ってゐるところは、何といっても雄大であるが、强いて言へば肩が張り過ぎてゐるのが氣に入らない。

北から南へ、次は南から北へ、順序はどうでもいいが、少なくとも一度づつ反對の方向へ遺跡を歩いてゐる必要がある。昔は途らしい途もなく、いろいろの默がゐたりして可なり困ったらしい樣に書いてゐるが、現今は大變に開けてゐて、たとひ單獨で歩いたところで、異類異形の怪物等は一つも出て來はしない。

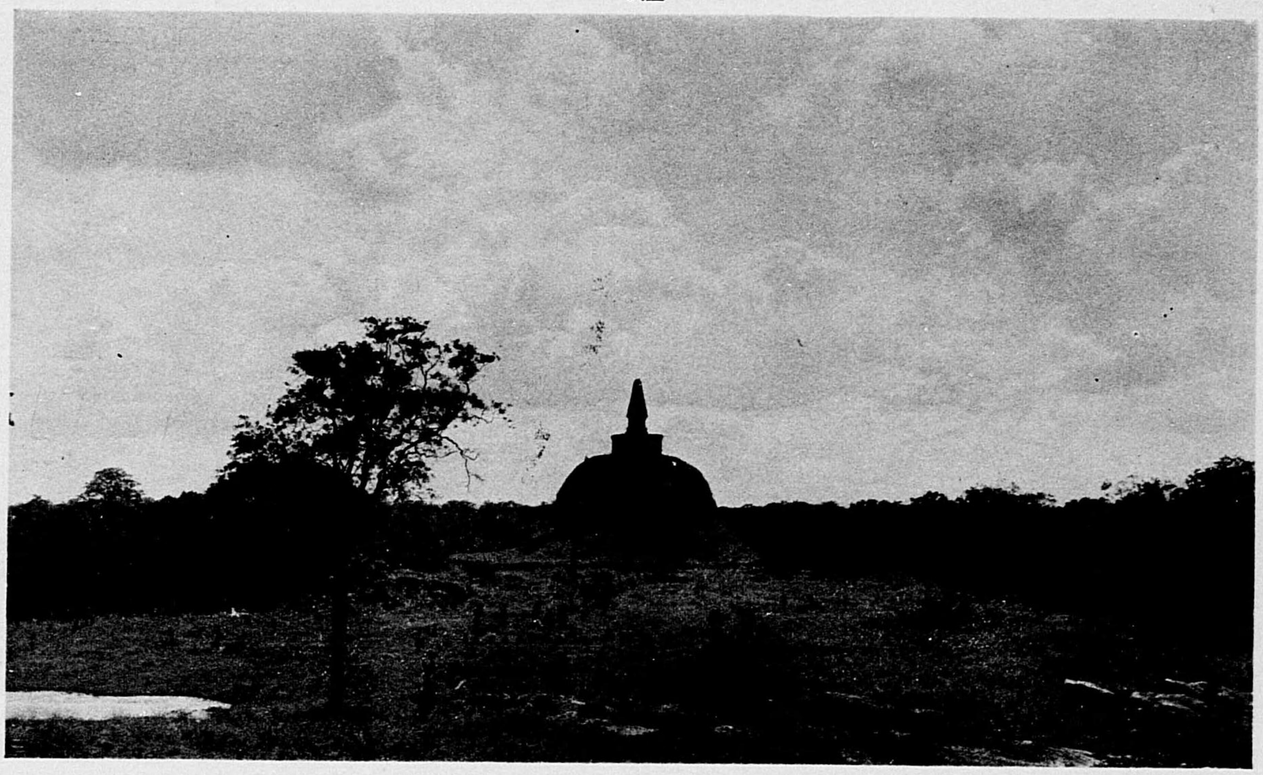
*　*　*　*　*

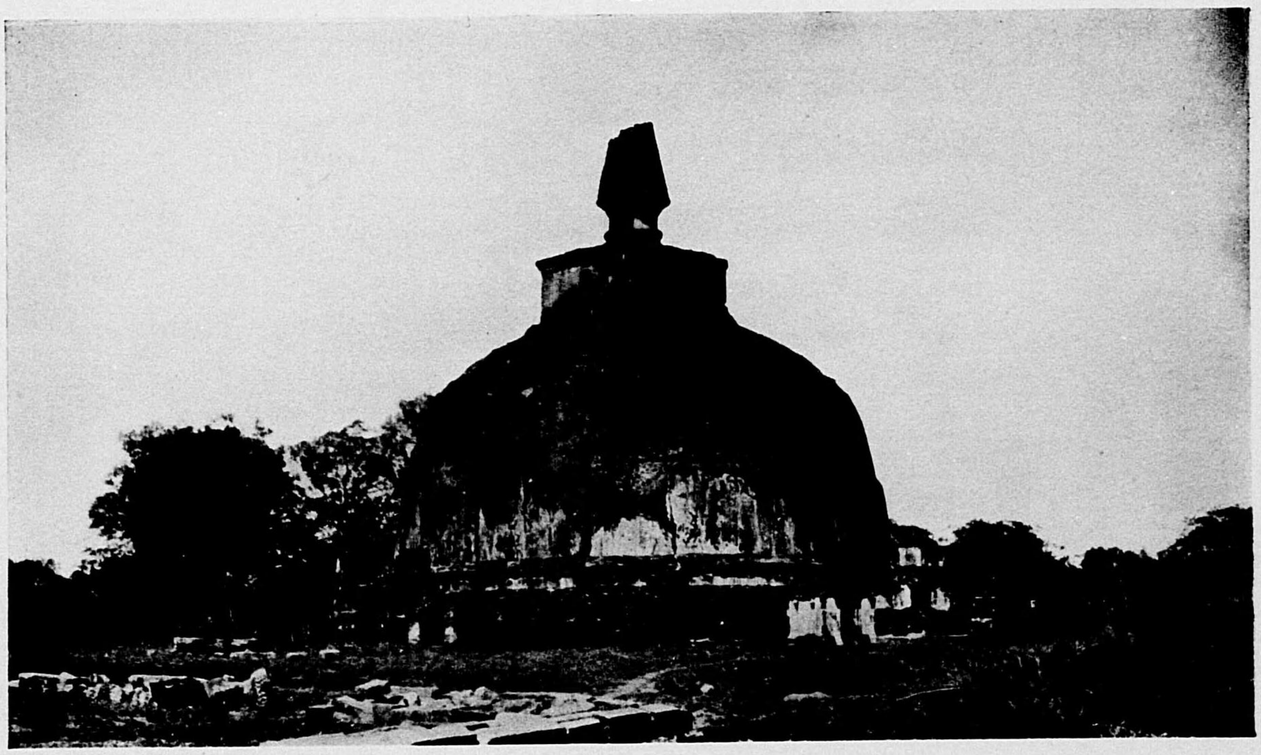
ランコット塔（Rankot Vehera）はアナラジャプラの諸塔に比較する時は、大分小さく、其順序は無畏山塔、祇園塔、金粉塔（Ruanweli）（以上アナラジャ市所在）の次に位置するので、第四位となる。此塔一名ルアンウェリ・サヘ（Ruanwelle-saye）といひ、金粉場（Place of Golden Dust）の意だといふ。此塔の創立に就いては諸說があり、殊に創立者に差がある樣であるが、原文引用をやめて左に表示しておく。

名	直徑（約）	高（約）	創立者	創立年代
ファーガッソン	一八六尺	一八六尺	キルチ・ニッサンカ・マラ	第十二世紀末
ミットン	一七七尺	一八〇尺	パラクラマ王第二妃	一一五四—一一八六
マレー案内書	一八〇尺	二〇〇尺		第十二世紀

【錫蘭考古局報告書】第二卷（Memoirs of the Archaeological Survey of Ceylon, Vol. II. 1926）には此塔はニッサンカ・マラが創立をしたか、又は此王が擴張をしたと書いてある。パラクラマ王の第二妃の建立說によると、一一五四年（久壽元年）から一一八六年（文治二年）の間だから、此は事實とすれば明かだが、もう一說のニッサンカ・マラ（Nissanka Malla）といふのは、一一八七年（文治三年）と一一九八年（建久九年）と年代に二說あり、前記の報告書は後說を採ってゐる。大體平安末から鎌倉初期へかけてのもの。平頭から相輪へかけてよく保存されてゐる。

一八五





一八六。錫蘭嶋ポロンナルワのキリ塔。

（昭和十一年一月三日）

ポロンナルワ所在佛塔二基の中の一。何故にキリ・ベヘラ（Kiri Velera）といふかといふに、「キリ」とは乳白色といふ事ださうな。當時其表面が全部乳白色の塗料（Chunam）で覆はれ、日光があたると白大理石の様に美しく光り赫いたさうである。それでその名で呼ばれる様になったといふ。キリ・ベヘラ（Kiri Weherа）と書いたのもある）は又キリ・ダーガバ（Kiri Dagaba）ともいふ。ファーガッソンによると塔の直徑約七〇尺、高さ約一〇〇尺で、煉瓦を以て築造し、漆喰を塗ってあるから、其時代即パラクラマ・バフ王時代に於ける拙作より、尚一層拙く見えると評してあるが、夫程でもない。併し相輪上部が缺損してゐるのと、ランコット塔同様肩が張り過ぎてゐるので、どうもやはり面白くない。

錫蘭嶋の塔は「ダーガバ」といふ、其語原は Dhatu＋Garbha＝Dagaba ださうで、神聖なる遺物を保存するために建設した半球形の記念物に對する錫蘭語ださうな。日本では「駄都」といふ時もある。近江安土の總見寺境内には天保十三年建立の「護國駄都塔」といふのがある。

上、**一八七**。バールハット塔婆玉垣部分　共一。

下、**一八八**。同　　共二。

（大正十二年一月十日）

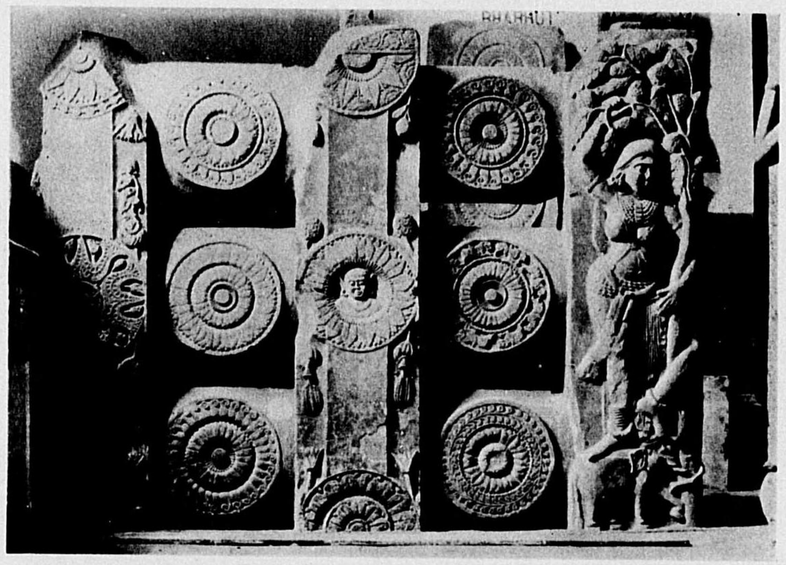
（大正十二年一月十二日）

右二圖は印度國甲谷他市所在の博物館に陳列してある塔婆玉垣の一部分で、其文様を見せるために掲げたもの。現地には何も殘ってゐないきうだから、恐らく一人で行ったのでは、以前どの邊に塔があったか判るまい。又此塔婆は既に最初發見された時、玉垣の一部分が殘ってゐただけであったので、塔其物のほんたとうの形等は知りようがない。西紀一八七九年（明治十二年）に「THE STUPA OF BHARHUT」A BUDDHIST MONUMENT」ORNAMENTED WITH NUMEROUS SCULPTURES」ILLUSTRATIVE OF」BUDDHIST LEGEND AND HISTORY」IN THE」THIRD CENTURY B. C.」といふ本、餘り長過ぎて一口に言へないから略して「THE STUPA OF BHARHUT」といふが、印度考古局の年報として出版された。其論文を書いたのは例のアレキサンダー・カニンガム。夫によると此塔は明治六年十一月の終りに近く、同氏によりて發見されたので、其時は殆ど土やごみと一所に玉垣の石は埋沒されて居り、僅にほんの一部分がたってゐたきうである。其後はできる限りの調査研究の結果、玉垣内徑約八十八尺、塔婆徑約六十八尺といふ事が判った。尚其上に塔婆は半球形の伏鉢型で平頭を有し、上に相輪があり美しく裝飾してあった事が想像されるのである。

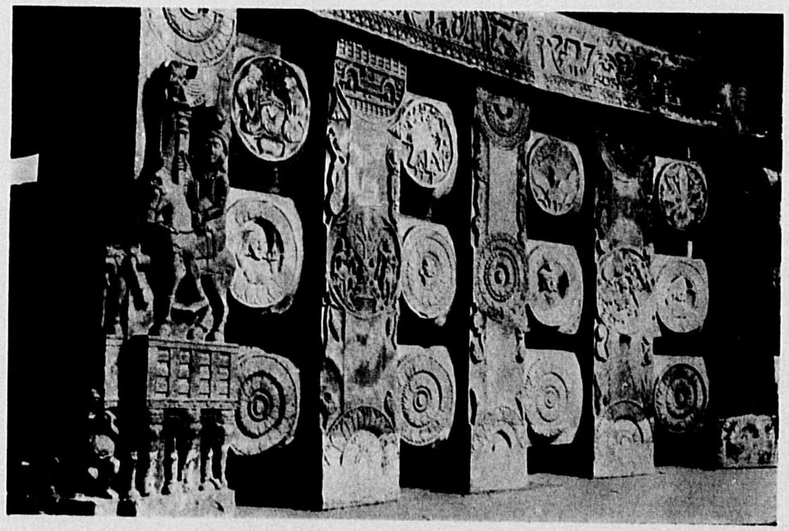
玉垣は四方に門があり、圓周を四象限に分けてゐた事、サンチ塔婆（**一一四・一一五**）の如く、各象限には柱十六本づつを三本の貫を以て連ね、上に笠石があった（**一八八**）。四方の門にはサンチ第一塔に於けるが如きトーランがたってゐたが、復原をするに充分な材料が見出されず、今甲谷他博物館に於いてみる如きものであったらうといふだけで、大部分推定復原に終ったのである。

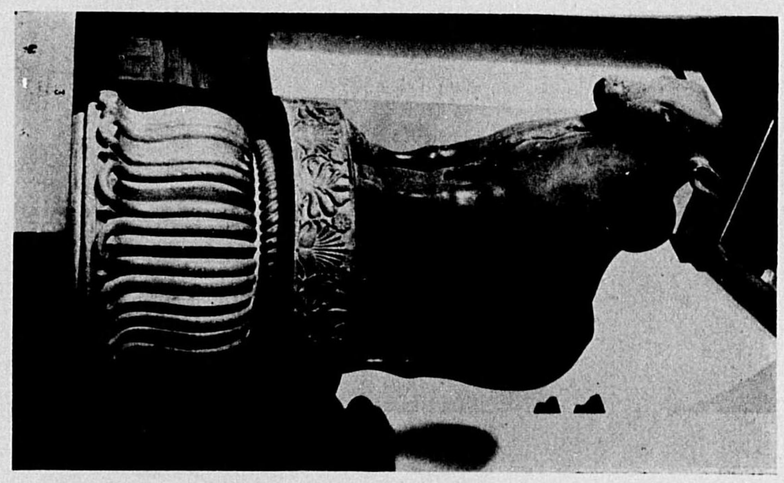
笠石は内外共一面に細かい彫刻がしてあるが、總數四〇個のうち十五個が發掘されてゐるから、つまり五分の三が亡くなったのである。内外側共面は三つに水平に分ち、中央の部最も廣く、内側には本生譚其他を、外側には滿開の蓮花を、上の間には内外共埃及式蓮、下の間には同樣瓔珞を刻してある。又玉垣の貫及柱の圓文内には蓮花・孔雀・象・人物・本生譚等、いろいろのものを彫刻してある。

一八七

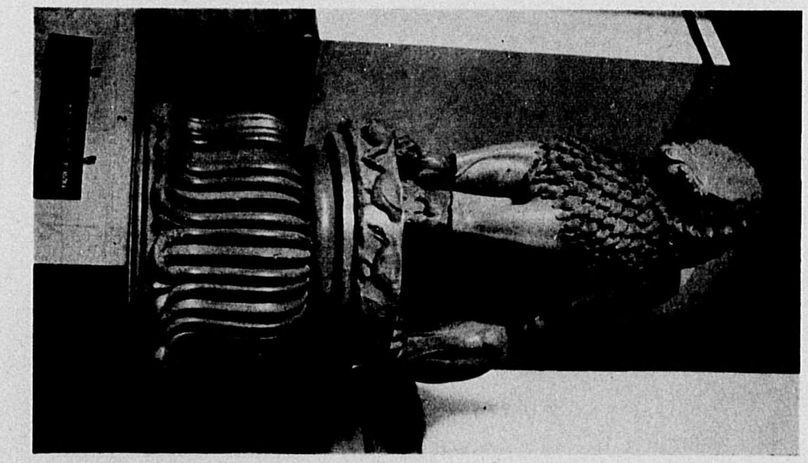


一八八





一八九



一九〇

右、**一八九。** 甲谷他博物館出陳ラムプルワ出土阿育王柱頭獅子。（大正十二年一月十一日）

左、**一九〇。** 同　甲谷他博物館出陳鹿野苑出土のうち阿育王柱頭のものは、既に**二五**に寫眞を掲げて解説をしたが、此圖は最後に甲谷他博物館出陳の一種を掲げておく。

一八九は北印ネパール國との境のチャムパランCampa（Champaran）行政區内、ラムプルワ（Ra）出土阿育王柱頭獅子。これは獅子が一頭乗ってゐるだけであるが、此地區に屬する（Lauriya Nandangarh）（ラクサウル）から汽車で三三哩のベッチアー（Bettia）驛の北一六哩（Lauriya）には、同じく獅子一頭を乗せた完全な柱がある。ローリヤ・ナンダンガール（Lauriya Nandangarh）（ラクサウル）から汽車で三三哩のベッチアー（Bettia）驛の北一六哩（Lauriya）には、同じく獅子一頭を乗せた完全な柱がある。**一九〇**は出土地の掛札がないので、きいてみたら同じくラムプルワ出土だそうな。同所から一つは少し斯に落ちかねるが、こういふ話である。これは印度半分のせたもの。ヶは

けには行かないから略しておく。井下の鬧敷蓮花の唐様柱頭に注意せよ。

佛教藝術のみではないので、頗る興味がある。詳しい事はとてもこゝで書きたてるわけにはゆかぬ。此水鳥即ハンサはこゝの邊が古いところで、陸分後差隨所にでてくる。取てむつけてゐる。

牛乳と分けて、牛乳だけ飲むといふ傳説的の鳥、英人は「セクリッド・ギース」といつてゐるが、ギースは常ならぬ時に白鳥も同様だが、牛乳だけ飲むといふ傳説的の鳥、英人は「セクリッド・ギース」といつてゐるが、ギースは常ならぬ時に白鳥も同様だが、とにかくたしかに水鳥には違ひない——ゐる、印度の神話にでてくる「神聖な白鳥」で、牛乳と水と混ぜてやると水は水、牛乳は牛乳だけを分けるといつてゐる。

今ここにあげた四例の内、鹿野苑のを除いては、何れも水鳥——ハンサ（Hansa）といつてゐるのでみると、獅子は恒合に例が多いと考へられる。其獅子の坐してゐる圓盤側面には、立つてゐるし、又サンチ正覚一塔南門脇の同柱頭には、鹿野苑の獅子が同じく四頭の獅子の上に立つてゐる。

西南（出土のもの）も同様で、ただ上には珍らしく象が乗つてゐる。サンチの四獅子の分には忍冬文様が陽刻してある。サンキサ（Sankisa）（アグラの東、シャージャハンプール）の西南（出土のもの）も同様で、ただ上には珍らしく象が乗つてゐる。サンチの四獅子の分には「ハンサと忍冬」をつけてある。何れも其他に圓盤下に輪形装飾や一種の玉縁（Beads and Reel）を飾つたのもある。

柱頭最下部の輪郭が波形曲線をしてゐる鬧敷蓮花は、既記の通り我國には、鎌倉時代に唐様建築勾欄親柱として輸入されたに過ぎないが、支那で考案されたあんな小規模のものではなかつた事が略想像できるであらう。

術語，人名，地名等略解

下に記すのは，解說中にでてきてゐる人名・術語等のうち，必要と認めたものの略解である。「はしがき」に斷った通り，圖を入れたらば一層よかったらうが，さう行かない事情もあったので，少し物足りなくなったが，蓋し止むを得ないのである．尙ほ述べる迄もないと思ふが，專門家の參考に供するのでないこと勿論である。

ア

阿育王。 アイクワウ，アソカ，Asoka (272—231 B.C.) チャンドラグプタ (Chandragupta) の孫，佛教を信じ，摩崖・石柱等に誥文を刻さしめた。

阿育王柱。 阿育王の建てしめた砂岩の一本石の石柱，上部の開敷蓮花上の平板上に，獅子・象・牛等を刻んだもので，其柱身に銘文を刻してある。主として北印・中印に遺物があるが，其最も完全なのはネパル國の境ラクサウルの西南ローリア・ナンダンガール (Lauriya Nandangarh) にある。

アンドラ王朝。 案達羅(Andhra)。前三世紀から後三世紀に亙り勢力のあった王朝。

菴沒羅。 アームラ(Āmra)。菴摩羅．阿末羅，菴羅。樹の名。

イ

イオニア式。 ギリシャ，ローマに行はれた古典建築樣式の名(Ionic Order)。柱頭に渦文があるのが特徵の著しき點。

カ

カントンメント。 印度に於ける英國軍隊の兵營 (Cantonment)。印度內大都市には大概カントンメントがあり，住民の區域と少し離れてゐるので，停車場は大概 City 驛と Cantonment 驛と二つある。ホテルでも公立宿舍でも後者に近くあるのが普通である。綴りが長いので略して Cant. 又はCantt.等，驛の立札に書いてある。例へば「BENARES CANTT.」とある樣なもの。

カニンガム。 General Alexander Cunningham。考古學者。「Ancient Geography of India」其他著書多し。故人。

カムループ。 Kamrup。アッサム（Assam）州内の縣名，ブータン國に境す，ブラマプットラ河に沿ふ。

回教建築。 マホメット教徒のもてる建築。ペルシャ，シリヤ，エジプト，スペイン，土耳古，印度，北アフリカ等に行はれた一種の建築で，其特徴は葱花型の圓屋根と，高く細き塔（光塔（Minaret））と聖龕（Mihrab）とを有することである。

唐様勾欄。 「カラヤヶコヶラン」。鎌倉時代に支那から渡來した二種の建築様式のうち，禪宗建築に用ひられてゐるところの，謂はゆる唐様建築の勾欄は，從來我國に行はれてゐたところの，擬寶珠をつけた親柱をもった和様勾欄と全然異なり，親柱は其柱上に開敷蓮花をつけ，又科束の科の代りに蓮葉（稀に蓮花）を用ひてあった。其柱頭開敷蓮は**一二五**，**一八九**，**一九〇**等の夫とまことによく似てゐる。唐様勾欄親柱柱頭の裝飾を，一般には「逆蓮」（ギャクレン）といってゐるが，これは誤認の結果で，蓮は逆ではなく，勿論便化ではあるけれども，花瓣が下向きに垂下したところである。これ等に就いての詳細は，この解說欄で述べてゐる事はできないから，總て他書に讓る。

片蓋，片蓋柱。 「カタフタ」，「カタフタバシラ」。半分壁についてゐる柱。遊離してゐない柱。だから時には控壁の用をなしてゐる。

龕。 ガン（Niche，ニッチ）。壁につくった凹所。花瓶等を置くために小さく引込んだところでも，又回教寺院に於いて，回教徒がメッカの方を禮拜するため，大きく半圓形に壁面に設けた凹所でも，何れも**龕**といふ。

キ

貴霜王朝。 貴霜（キソウ，Kushan）王朝即印度スキタイ王朝（Indo Scythian dynasty）は西紀後45—225。

拱。 キョウ。アーチ（Arch）の事。迫持（セリモチ）といふ。石なり煉瓦なりが互に迫合って持ってゐるから。

コ

コリント式。 ギリシャ，ローマに行はれた古典建築様式の一で，最も賑かで且つ美しいもの（Corinthian Order）。柱頭にアカンサス葉飾があるのが特徴の一。

ゴーハチ。 Gauhati。カムループ縣の主邑で，ブラマプットラ河の南岸にある。

ゴシック建築。 ゴシック建築は尖拱を有する建築で，大凡西紀後1200（正治二年，鎌倉初期）—1500（明應九年，室町中期）に隆盛を極めたのであるが，終りに近く Fan Vault（扇穹窿）等が發達し，遂に Fan and Pendant Vault 等にまでなった。ゴシック建築全盛時代といったのは，終りに近いこの様な時代を指したのである。

光　塔。 回教寺院等に用ひられた細長なる塔。Minaret といふ。例へば**三六・四〇**等に見る様なもの。モスクの場合には上部の露臺から勤行時報係（Muezzin）が大聲で祈禱の開始を告げる。我國の多くの旅行家は尖った高塔だものだから，「尖塔」と譯してゐるが，我我はゴシック式耶蘇會堂の細長で尖った塔なる Steeple, Spire をいふ。Minaret なる語は Minar＝Light house，nár＝shine といふ様なところからとある。

後　陣。 耶蘇會堂のアプス（Apse）。普通後方即東端の圓形の平面を有せる部分。

公立宿舍。 可なり大きな町でも（田舍では勿論）ホテルのない時は其代り政府で建てた宿舍がある。ダク・バンガロー（Dak Bungalow）といふ。これは空室さへあればいつ行っても24時間だけは其室を占領できるから，食事はともかく，泊るところには困らない。併し若し空室がなければ，如何ともしがたいから，餘り夜おそく行かぬ方がよろしい。一室24時間の代一ルーピー，これはたとひ三十分休憩しても今の規定では同額の料金を支拂はなければならない。Dak とはヒン

ドスタニ又はヒンヂで Post といふ事ださうな。さうすると「ポースト」は驛とか宿とかいふ意だらうから,「驛又は宿にたてた一階建の茅葺のある家」といふことになるであらう。略してD. B. とかく。D. B. には食事をつくってくれるのと，部屋だけ貸すのとある。カンサマ (Khansama, Khansamah, 料理人) がゐる時は食事はできるが，さうでないと自分でしなければならない。

同じ様な宿舎に I. B. (Inspection Bungalow) 又は I. H. (Inspection House) といふのがある。これは大概豫め承認を得ておかないと，だしぬけに行ったのでは宿泊はできない。だから I. B. だけで D. B. のない所は，豫告なしだと驛の待合室へでもねなければならない。

筆者は嘗てゴラクプール (Gorakhpur) といふ大きな町の I. H. へ二泊した事があった。此種の宿舎が二箇所にあり，一は特等で他は普通であったが，さういふ事はついてゐる迄知らなかった。筆者は幸にして特等の宿舎に行ったが，設備萬端申分はなかった。但し前以て得た宿泊承諾證についてゐた注意書に，カンサマが居ないから食事は自辨しなければならないとあった。この邊のことは，後の旅行者は注意しておく必要があらう。

此他に R. H. (Rest House) といふのがある。これは大概 D. B. と同じで，だしぬけでも泊れる。私には明かに D. B. と R. H. との區別が判らないが，都合により適當に呼んでゐるらしい。

ク

クシナガラ。 カニンガムが嘗てカシア (Kasia) の附近を夫と推定し，後現地で大涅槃像其他のものを發掘したので，殆どここと定まり，日本から佛跡巡禮に出かけた坊さん達の旅行記を見ると，皆無條件でここときめて居るやうだから，或はさうかも知れないが，可なり異說もあり，殊に釋迦生誕地なるルンビニ園の位置が確かになってからは，法顯や玄奘の記事は，現在のところでは成立しないといふことである。然らばどこかといふに，今のネパル國內，印度國境に最も近いビルガンジ (Birganj) の北方位に當るらしい。これが一說。

もう一つはブータンに境を接するカムループ縣の主邑なるゴーハチの北岸に Sal Kusa といふ村があるが，世尊の入涅槃地はここだといふのが一說。

洵に遺憾ながら，其方面の智識皆無で，批評も判斷もしようがない。併し現地をともかくも涅槃の傳說地として **二五・二六** に寫眞をだしておいた。序ながら近年ビルマ人により再建されたといふ涅槃堂後方の塔は，何とも拙いものを建てたので，筆者をして忌憚なく言はせるなら，あんなものは建てない方が餘程いい。せめて專門家にでも相談をして，たとひ舊塔より少し小さくても，夫は費用の關係で仕方がないから，形だけはもう少し何と かできなかったものか。

隅　弓。 「グウキュウ」とよむ。正方形か正八角形の室に圓い形の平面を持った半球形の屋根 (即圓蓋 (Dome)) を架けるときは，四角なり八角なりから圓に移るところには，「曲面をもった一種の三角形ができる。其部分の名で，英語では Pendentive といふ。英和辭典等には「三角穹窿」「隅折上」等の譯がつけてあるが，我我は「隅弓」といってゐる。

サ

サンタ・マリア・デル・フヰオレ。 伊太利國フロレンス市の大會堂，Santa Maria del Fiore とかく (A. D. 1296 (永仁四年)—1462(長祿三年))。アルノルフォ・ヂ・カムビオ (Arnolfo di Cambio) の設計。後大分に擴張された。

相　輪。 塔の最上部金屬製の部分。日本の塔は下から順に露盤(ロバン)・伏鉢(フクバチ)・請花(ウケバナ)・九輪・水烟(スイエン)・龍車(リウシヤ)・寶珠(ホウジユ)より成る。普通は輪數九であるので，相輪を一に「九輪」といふが，九とは限らない。

心　柱。 サツ。塔の心柱のこと。

シ

身　廊。 耶蘇會堂內の中央の廣間 (Nave)。

舍利弗。 シャリホツ (Sariputra)。舍利弗多，舍利弗羅，舍利子，舍利富多羅，舍利補坦羅等ともかく。「舍利」は母の名で，「弗」・「弗多」は多羅の略で「子」。舍利といふ女人の子故「舍利弗」「舍利子」といふのださうである。

ス

隅迫持・隅拱。 壁面が出會ってゐる時，其出會ってゐる境界につくった拱をいふ (Squinch Arch)。

セ

制多・制底。 チャイチヤ (Caitya, Chaitya)，「制多羅」・「制底耶」ともかく。又「支提」ともいふ。普通舍利のあるのを「塔婆」舍利のないのを「制多」といふ。其他諸說があるが，要するに塔婆と同意義に用ひられる時もある。

施無厭。 ナランダ寺の說明に，【大東西域記】に「是如來在昔，菩薩行ヲ修セシトキ，大國王ト爲テ，都ヲ此地ニ建テ，衆生ヲ悲愍シ，好ンデ周給ヲ樂メリ，時ニ其德ヲ美メテ，施無厭ト號セリ，是ニ由リテ伽藍，因テ以テ稱ト爲スト，云云」とある。「那爛陀」とは「Na+alam+da」即「施無厭」と說明してゐる。

迫持。 セリモチ。アーチの事。拱。

セシル・ベンダル。 Cecil Bendall. 1886年(明治十九年)に A JOURNEY OF LITERARY AND ARCHAEOLOGICAL RESEARCH IN NEPAL AND NORTHERN INDIA DURING THE WINTER OF 1884—5 といふ旅行記を出版してゐる。此書の圖版第四にバータンのクムベスワラ(Kunbheçvara, Kumbesvara)堂の寫眞がのせてある。バートガオンの五重塔なる Devi Bhawani Temple(**一六**)と同樣，ただ基壇が一重なのと，初重が單列周柱式になってゐないから，その邊が少しく淋しくなくもないが，既に震災で跡方もなくなって了ったから，此圖版は貴重である。併しベンダルは梵語學者であったと見え銘文等の研究はのせてあるが，建築に就いての記事は

殆どない。序ながらバータンの池畔の佛塔(**一四**)も該書の圖版第六にだしてゐるが，比べてみると塔の形に大分の差がある。修理をする度毎に，いい加減にすると見え，形はいつも變るのであらう。

ソ

側廊。 耶蘇會堂の脇の間，身廊の兩隣，Aisle(アイル)。身廊の兩側に側廊が一と通りの時と二た通りの時とある。

葱花窓。 葱の花の樣な，下部膨れ上部の反った曲線をもった窓。大體の輪郭は擬寶珠の樣な形のもの，此圖版の窟殿の制多窓及び僧坊の出入口に實例が多く見出される。**九三**以下參照。

葱花屋根。 葱の花の樣な形をした屋根。**二**其他回教寺院に類例多し。つまり偉大な擬寶珠型のもの，「バルバス・ドーム」(Bulbous Dome) といふ。

タ

多寶塔。 塔の形式の一。日本の塔で（石築でも木造でも）下層方形上層圓形の平面を有し，上下層共方形の屋根を架け，相輪をあげたもの。つまり二重塔，單層の時は單に寶塔と呼んでゐる。

大目犍連。 摩訶目犍連，マカモクケンレン (Māha-maudgalyāyana)。略して目犍連・目連といふ。又摩訶沒特迦羅，沒特伽羅子等。佛十大弟子の一人で，神通第一と稱せられた人。「神通第一」とは「神足輕擧，飛到十方」のことだといふ。舍利弗と共に佛の弟子になった。

ダゴバ，ダゴパ。 Dagoba, Dagopa。パリ語 Dhatugabbha，梵語 Dhatugarbha といふ語源からできたさうで，窣堵婆の伏鉢の事。錫蘭語。又Dhagba, Daghoba とも綴る。

チ

チュードル・ローズ。 Tudor Rose。ゴシック建築の各時代のうち，第十六世紀の前半(A. D. 1485(文明十七年)—1558(永祿元年))，即ヘンリー七世，同八世，エドワード六世，女王メアリー時代をチュードル時代 (Tudor Period) といってゐるが，此前代即垂直期 (Perpendicular Period)

以來，五瓣復瓣の一種の薔薇の花が裝飾として用ひられる樣になった。チュードル王家の紋章で，これを「チュードル・ローズ」といふ。錫蘭嶋ポロンナルワの世にも珍らしい蓮花風呂(**一八三・一八四**)を，ものもあらうにチュードル・ローズに見える等とは言語道斷である。ベドサ窟殿制多窟內塔婆平頂上に，心柱の上に蓮花をのせてゐるが(**一〇〇**)，其適不適は姑く措き，薔薇花の樣な裝飾 (rose like ornament) と書いた書物がある。其著者は歐羅巴人か印度人か知らないが，隨分見當違ひの事をかくものだと思はされた。

チュナム。 Chuuam. これは Chúná の轉訛だといふ。貝殼から製造したもので非常に光輝のある白色の塗料。一種の石灰。

ナ

那爛陀僧伽藍。 ナランダ・サンガラマ (Nālanda Samgharāma). サンガラマとは「僧伽藍摩」又は「僧伽羅摩」とかき，又「僧伽阿羅摩」としたのもあるが，「サンガ」と「アラマ」と二語が集ってなったのだから，この最後のが最もよくその源を現はしてゐる。略して「僧伽藍」・「伽藍」等。衆園といふ。「僧伽は衆なり。羅摩は園なり」とあるので，翻譯すれば「衆園」となる。寺。

ハ

ハイデラバード。 普通 Hyderabad と綴るが，又 Haidarabad ともかく。さうしてハイダラバードといふ地名は，印度中に五ケ所位ある。ハイダラバードを入れれば六つになるが，インダス河口唐地から程遠くないシンドの都ハイダラバードと，デッカン高原の土王州ハイダラバードの二つだけが，いつも大概關係をもってゐるので，他のは大して問題ではない。

狹間飾。 ハザマカザリ。窓に嵌込んだ裝飾。

バオリ。 Baoli。階段・露臺・廊・室等を備へた，而も立派な彫刻等をつけて裝飾をした井戸。

パラッツオ。 Palazzo。伊太利に於ける宮殿邸宅，英語の Palace。

パータン建築。 パータンとは Pathan と綴り，普通印度の西北境に住するアフガン族の名で，パータン族が印度を征服し，其結果印度の北方から中印方面にかけて移入した一種の建築樣式をいふ。普通次のやうに分けられてゐる。

初期パータン式……1193(建久四年)—1320(元應二年)

中期パータン式……1320(元應二年)—1414(應永二十一年)

後期パータン式……1414(應永二十一年)—1556(弘治二年)

モーガル式……1556(弘治二年)—1660(萬治三年)

例へばフマユン王廟(**四一**)はモーガル式の初期，ジャーマ・マスジド(**四〇**)は其中期に屬してゐる。

ヒ

毘首羯磨。 ビシュカツマ(Visvakarma)。毗守羯磨，毘顯縛羯磨といふ。帝釋天の臣で種種の工巧物を化作し，又建築を司る天神ださうで「種種工業」と譯してゐる。エロラ謂はゆる毘首羯磨窟(**一一〇・一一一**)一名 Carpenter's Cave といふのは，此天が建築を司るので，大工が參詣をするからでたとある。

毘訶羅窟。 ビハラ(Vihara)窟。ビハラは精舍。Jetavana Vihara を祇園精舍と譯す。僧坊。又は僧坊或は窟殿に於ける室或は廣間。錫蘭島に於いては佛堂を指す。僧侶の集合場も亦ビハラといふ。

フ

ファーガッソン。 Fergusson. 印度建築研究の先覺者。「A HISTORY OF INDIAN AND EASTERN ARCHITECTURE」二冊は甚だ有名で，且つ一通り調査研究するには必要な書物である。故人。

ブルーネレスキ。 伊太利國フロレンスの耶蘇大會堂 (Santa Maria del Fiore) の大圓蓋を競爭計畫の結果，1420年(應永二十七年)から1437年(永享九年)にかけて建築した人。ゴシック建築に復興式の圓蓋を架けて，少しも不自然でないところに，彼の手腕の非凡さが偲ばれる。「ブルーネレスキの圓蓋」として頗る有名である。Filippo Brunelleschi。

へ

平　頭。　ヘイトウ。塔に於ける伏鉢の上の立方體の部分。例へば**九・一一・一三・九四・九六・一八五・一八六**等。外國のは何れも立方體だが，我國のは總て退化して形式化して了った。夫でも奈良藥師寺の夫は立方體をしてゐて，よく古式を存してゐるが，他のは總て圓形の平面を有し，其周圍に花瓣がついてゐる。印度に於いては舍利は平頂に納めるのが本來で，勿論除外例として伏鉢内に安置する時もある。印度では「Tee」といふ。これはビルマ語の「Hti」英語化したものといふ。梵語でハルミカ (Harmika)。

ホ

菩提樹。　Pippala。畢鉢羅，必鉢羅，痺鉢羅等。世尊此樹下に菩提を證したので菩提樹といふ。「金剛座上ノ菩提樹ハ即畢鉢羅ノ樹ナリ」と【大唐西域記】にある。

bodhi druma。學名 Ficus religiosa。

日本にて菩提樹といふのは「支那原產ニシテ多ク古刹等ニ植エラルル落葉喬木ナリ」「本種ハ眞正ノ菩提樹ニ非ズ」と【植物圖鑑】に書いてある。

マ

マンダパム。
マンタパム。　Mandapam, Mantapam。殿堂前にある柱間に建具の無い吹放しの建築。

メ

盲　窓。　メクラマド。緣緣は窓と同じ樣にしてあるが，內部は壁等にして實際は採光の用をなさず，單に裝飾として役立ってゐるもの。(英) Blind Window。

エトスP-37

昭和十九年三月十日印刷
昭和十九年三月二十日發行
初版1,500部

定價 拾貳圓
特別行爲稅相當額 八拾六錢
合計金 拾貳圓八拾六錢

本丁亀丁は何時にても取替へます

出文協承認
あ330299號

著者 天沼俊一
京都市中京區寺町通二條南入
株式會社 大雅堂

發行者 本田壽次郎
專務取締役
京都市下京區七條御所ノ内西町一
(西京二)日本寫眞印刷有限會社

印刷者 鈴木直樹
代表者

發兌
京都市中京區寺町通二條南入
株式會社 大雅堂
電話 上京(3)二九〇五番
振替 京都三四二〇番
支店 東京都本郷區湯島一丁目一番地
(日本出版會登錄第壹壹六五六六番)

(配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社)

(松尾製本・京都製本工業組合10號)

終